

平成 20 年度（2008 年）修士論文

異文化コミュニケーションとしての翻訳行為
—機能主義翻訳理論の観点からの考察—

国際文化研究科

国際文化交流論専攻

（言語コミュニケーション論）

A7KM1016 金 炫 珂

目 次

第 1 章 はじめに	1
1.1. 研究の背景と目的	1
1.2. 研究方法	2
1.3. 論文の構成	2
第 2 章 理論的枠組み	4
2.1. 機能主義翻訳理論	4
2.1.1. テキストタイプ別翻訳理論	4
2.1.2. スコポス理論	5
2.1.3. 翻訳行為の合目的性	7
2.2. 翻訳のストラテジー	8
2.3. 自国化翻訳と異国化翻訳	10
第 3 章 研究方法	12
3.1. 分析対象	12
3.2. 分析方法	13
第 4 章 分析と考察	15
4.1. 題目・目次	15
4.2. 呼称・人称ダイクシス	18
4.2.1. 呼称	18
4.2.2. 人称ダイクシス	23
4.3. 交感的言語使用・文体	28
4.4. 非言語コミュニケーション	35
4.5. 社会文化的慣習	42
4.6. 慣用表現	50
4.6.1. 慣用句	51
4.6.2. 諺	53
4.6.3. 漢字成語	57

4.7. 固有名詞・地名	59
4.7.1. 固有名詞	60
4.7.2. 地名	70
4.8. 文化関連語彙	74
4.8.1. 伝統・慣習	75
4.8.2. 社会・制度	79
4.8.3. 衣食住	83
4.8.4. 度量衡単位	89
第5章 おわりに	92
【謝辞】	94
【参考文献】	95
【分析テキスト】	98

第1章 はじめに

本論文は、異文化コミュニケーションとしての翻訳行為に関して、機能主義翻訳理論の観点から考察した研究である。本章では、本研究の目的を明らかにし、その背景と理論的枠組み、研究の方法について簡単に説明する。最後に本論文の構成について述べる。

1.1. 研究の背景と目的

異文化コミュニケーションとは、異なる言語や文化的背景を持つ人々がコミュニケーションをとるとき、お互いの文化を異文化として認識し、理解しあう行為のことである。コミュニケーションは単なる言語メッセージの伝達ではなく、言語外の文化要因を前提として行われる行為であるため、異なる文化を持つ人々の間で交わされるコミュニケーションには、常に共通の前提の不在から来る障害要因が含まれていると言っても過言ではない。

異文化コミュニケーションの最前線とも言える翻訳という行為は、はじめから二つの言語と文化を前提として行われているだけに、翻訳時に生じる諸問題は言語内の要因はもとより、言語外の要因、つまり異質な両文化の差異からも発生する。よって、異文化コミュニケーションの受信者であると同時に発信者でもある翻訳者には、二つの異なる言語と文化の間で行われるコミュニケーション行為を成功させるための、能動的かつ創造的な異文化の仲裁という役割を果たすことが求められる。

そこで、本研究では翻訳を起点テキスト(Source Text=ST、原文)の文化と目標テキスト(Target Text=TT、翻訳文)の文化の間で行われる異文化コミュニケーション行為として捉えている「機能主義翻訳理論」の立場から、翻訳の異文化コミュニケーション機能についての考察を試みる。

なかでも、翻訳過程を決める最も重要な原則は翻訳行為全体の目的(Skopos¹)であると主張する Reiss と Vermeer の「スコポス理論」に基づき、一つの ST と異なる文化的背景を持つ複数の TT を比較・対照することで、異文化コミュニケーションを図るための翻訳者のスコポスが翻訳方法の選択にどのような影響を与えているのかを明らかにする。

¹ スコポス(Skopos)とは、「的、標的」という意味のギリシャ語で、Vermeerが「翻訳の目的」を表す用語として使いはじめた概念である。

従って、本研究の目的は、まず効果的な異文化コミュニケーションのための翻訳者の翻訳スコパスが実際の TT にどのように表れているのか、また、TT のどのような部分で各々のスコパスの差異が発生するのか、そこに一貫した基準は見られるのか、そして、ST 文化圏と TT 文化圏との距離がそのスコパスの選択に何らかの影響を与えているのかを探ることにある。

1.2. 研究方法

本研究では、異文化コミュニケーション行為としての翻訳の機能を考察する上で、二つの翻訳スコパス、つまり Venuti(1995)の「自国化翻訳」と「異国化翻訳」という観点から分析を進める。自国化翻訳とは、ST の異国的で見慣れない要素を TT の文化と慣習に合わせて翻訳し、TT の異質感を最小化する戦略であり、異国化翻訳とは、ST の異質で異国的な要素を TT にそのまま残すことで、TT の異質感を最大化する戦略である。

具体的な分析は、スコパス理論をベースにして翻訳方法を分類した藤濤(2005)の「翻訳方法の一覧」を用いて行う。その中で (1)移植、(2)音訳、(3)借用翻訳、(4)逐語訳を ST 中心の異国化翻訳方法、そして、(5)パラフレーズ、(6)同化、(7)省略、(8)加筆を TT 中心の自国化翻訳方法と見なして分析した。なお、(9)解説はどちらにも併用される可能性があるため実例から判断することにする。

なお、本研究では、分析対象として日本語の ST とその韓国語訳、そして英語訳を用いて分析を行う。具体的な分析テキストは、村上春樹著『ノルウェイの森』と吉本ばなな著『キッチン』、奥田英朗著『イン・ザ・プール』、宮部みゆき著『魔術はささやく』、そして各々の韓国語訳と英語訳である。

1.3. 論文の構成

本論の構成は以下のとおりである。まず、第 1 章では本研究の背景と目的及び研究方法を紹介した。第 2 章では本研究の理論的枠組みである「機能主義翻訳理論」とそれに基づいた藤濤の研究を概観し、本研究の分析基準である Venuti の自国化翻訳戦略と異国化翻訳戦略を概説する。次に、第 3 章では本研究の分析対象になるテキストを紹介し、その選定理由を明らかにした上で、本研究で採用する分析基準及び分析方法を詳しく説明する。続いて、第 4 章では第 3 章で示した分析方法に基づいた分析の結

果を、(1)題目・目次 (2)呼称・人称ダイクシス (3)交感的言語使用・文体 (4)非言語コミュニケーション (5)社会文化的慣習 (6)慣用表現 (7)固有名詞・地名 (8)文化関連語彙 の八つのカテゴリーにまとめ、各カテゴリー別に具体例を挙げながら自国化翻訳と異国化翻訳という観点からの考察を行う。最後に、第5章では本研究の結論をまとめ、今後の課題を述べる。

第2章 理論的枠組み

翻訳理論研究の中心が ST 中心から TT 志向へと移りはじめていた 1970 年代後半から 1980 年代に登場した「機能主義翻訳理論」は、翻訳の持つ目的と機能を強調し、翻訳を ST の文化と TT の文化の間で行われる異文化コミュニケーション行為として捉えている。

いわゆる「スコポス理論」で代表される機能主義翻訳理論は、ドイツの Katharina Reiss と Hans J. Vermeer によって誕生し、その後、Christiane Nord によって継承・体系化され、今では実務翻訳の現場で幅広く取り入れられている。

本章では、まず機能主義翻訳理論を Reiss のテキストタイプ別翻訳理論と Reiss と Vermeer のスコポス理論、そして Nord の翻訳行為の合目的性に即して概説し、その後、機能主義翻訳理論に基づいた翻訳の異文化コミュニケーション機能に関する藤濤の研究を考察する。そして、最後に本研究の分析基準である Lawrence Venuti の自国化翻訳戦略と異国化翻訳戦略を紹介する。

2.1. 機能主義翻訳理論

2.1.1. テキストタイプ別翻訳理論

Reiss は「等価(equivalence)」の概念を基に、ST と TT の機能的関係を中心とした翻訳評価の体系化を目標にした。とはいえ、Reiss の言う等価は従来の等価関連の研究で扱われていた単語や文章単位での等価とは異なるテキストレベルでの等価であり、言語の機能とテキストタイプ、そして翻訳戦略との関係に基づいた等価の実現を主張している。

Reiss(1971)は、言語には叙述機能、表出機能、訴求機能の三つの機能があると主張した Karl Bühler の「organon model」を翻訳理論に適用し、各々のテキストに優先する目的と機能によって、三つのテキストタイプを設定する。

Reiss の分類によると、テキストタイプにはまず、情報の伝達が主な機能である「情報型テキスト(informative text)」があり、発信者の考えと表現の特徴を伝える「表現型テキスト(expressive text)」、そして、受信者を説得して何らかの行為をするように訴える機能が重視される「効力型テキスト(operative text)」がある。

Reiss は各テキストのタイプによって異なった翻訳戦略が求められると主張する。つまり、「情報型テキスト」の翻訳には ST の指示的・概念的内容を完全に伝達し、分か

りやすい散文体を使って、必要な場合は明示化戦略を使用する。このタイプのテキストにはニュースや学術書などがある。次に、「表現型テキスト」の翻訳では、STの美学的・芸術的形式を伝える。翻訳者はST著者の観点から著者との同一視戦略を基に翻訳しなければならない。例えば、詩などの文学作品がこのタイプに入る。そして、「効力型テキスト」の翻訳では、TTの受信者から求められている反応を引き出さなければならない。翻訳者は改作や翻案などの方法を通じて、TTの受信者から効果の等価を具現する。このタイプのテキストには広告や宣伝などが入る。

Reissはこれに加えて、四つ目のテキストタイプとしてテレビやラジオ、歌、演劇のように言語外の媒体が関わる場合として、「マルチメディア型テキスト(multimedial text)」を挙げ、このタイプの翻訳では、視覚的イメージや音楽などでTTを補完しなければならないと主張する。

Reissによれば、最も理想的な翻訳は、TL(target language)でSL(source language)の概念的 content、言語的形態、コミュニケーション機能と関連した等価を目標にする翻訳(1977/1989: 112; Nord 1997: 15)であり、テキストタイプ別翻訳理論は翻訳者が特定の翻訳スコポスのために必要な等価レベルの適切な階層構造を具体化するために役立つ(Reiss and Vermeer 1984: 156; Nord 1997: 63)と言う。

Reissの研究は、言語レベルに止まっていた従来の翻訳理論とは異なり、言語が誘発する効果を超え、翻訳によるコミュニケーションの目的までも考慮したという点から重要な意味を持つ(Munday 2001: 76)と評価されており、その後、スコ-pos理論の重要要素の一つであるテキストの結束性(coherence)の概念へと発展し、機能主義翻訳理論の成立の土台を構築することになる。

2.1.2. スコ-pos理論

スコ-pos(Skopos)とは、「的、標的」という意味のギリシャ語で、Vermeerが「翻訳の目的」を表す用語として使いはじめた。スコ-pos理論は翻訳を人間行為の一つとしてみているとの点から、Holz-Mänttariの「翻訳行為理論(theory of translation action)」とも共通点があり、通訳や文学翻訳など全ての翻訳ジャンルに適用できる一般理論(general theory)を目指す(Vermeer 1996: 13)。

スコ-pos理論によれば、いかなる翻訳であれ、翻訳過程を決める最も重要な原則は翻訳行為全体の目的(Skopos)である(Nord 1997: 45)。Vermeerは言語学だけで翻訳過

程を説明し、翻訳の問題を解決するには限界があると指摘し、翻訳過程を「翻訳行為」として捉え、その問題の解決を試みた。つまり、人間の行為は与えられた状況下で発生する意図的かつ目的のある行為であるとし、翻訳という行為も人間の行動であるため、翻訳も個人対個人又は異なる文化の間で発生する意図的な行為であると主張する (Vermeer 1978/1983b: 49; Nord 1997: 18)。即ち、Vermeerによれば、翻訳は ST の著者と翻訳を依頼するクライアント、翻訳者、そして TT の読者の間で行われる意図的な相互作用であり、翻訳者という媒介者を通じて異なる文化に属する構成員の間でのコミュニケーション機能を担う異文化コミュニケーションである (Nord 1997: 44-52)。

スコポス理論が一般理論として提示する基本規則は次のとおりである (Reiss and Vermeer 1984: 119; Munday 2001: 79)。

1. TT(translatum²)はスコポスによって決められる。
2. TTは SC(source culture)と SLが提供した情報を TC(target culture)と TLで伝える役割、つまり「情報の提供(informationsangebot)」を果たす。
3. TTは逆の方法での情報の提供はしない。言い換えれば、TCでの TTの機能を必ずしも SCでの STの機能と同じくする必要はない。
4. TTは内部的に結束性を持たなければならない。
5. TTは STとの結束性を持たなければならない。
6. 上記の規則は優先順位によるものである。よって、スコポスが何よりも優先する。

この基本規則からも分かるように、TTの内部的結束性が STとの結束性よりも上位規則であることは、スコポス理論では、STよりも TTが優先することを意味する。STは充実に再現すべき対象ではなく、情報を提供する存在になり、STの一部又は全体が TTの受信者のための「情報の提供」へと変化する (Vermeer 1982; Nord 1997: 20) ことになる。そのため、理想的な翻訳は「等価」を実現するのではなく、TTのスコポスを達成するのであり、そのスコポスを達成することが翻訳行為の目的である。

では、スコポス理論において、翻訳のスコポスを決めるのは何であろうか。Vermeerは翻訳のスコポスを決める最も重要な要素の一つとして TTの受信者を挙げている。翻

² スコポス理論ではTTのことを、「translatum: 翻訳の目的による機能的に適切な翻訳の結果物」という。

訳という行為は意図された受信者を対象にしている。なぜならば、翻訳するというのは、目標状況の下で、目標にしている目的のため、目標にしている受信者を対象に、目標背景の中でテキストを生産することを意味するからである (Vermeer 1987a: 29; Nord 1997: 20)。

Munday(2001)も指摘しているように、スコポス理論の重要な長所の一つは、同一テキストであっても、TTの目的と与えられた翻訳依頼書(translation commission)によって様々な TT が誕生することを可能にした点である。

従来の翻訳理論が ST を中心に全ての翻訳過程と TT を評価し、研究を行っていたのに対し、スコポス理論では TT を中心に翻訳を論じて、翻訳の方向と過程を考察する。これは、実用レベルでの翻訳の機能を何より重視し、ST と等価概念に縛られていた翻訳理論研究に新たな方向性を示したという点から大きな意義を持つ。

「スコポスは、TT を尊重するある原則によって、意識的そして持続的に翻訳しなければならないことを言う。しかし、スコポス理論はその原則が何かについては言わない。それは各々の場合によって、それぞれ決められることであるからである」と Vermeer (1989/2000: 228; Munday 2001: 80)が述べているように、結局、スコポス理論は、翻訳の目的によって、一つの ST に対して様々なレベルの等価性を持つ TT が存在することを認め、異文化コミュニケーションの媒介者としての翻訳者の存在と役割を明らかにする理論的背景を与えていると評価できる。

2.1.3. 翻訳行為の合目的性

Nord はこうしたスコポス理論に基づき、より詳しい機能主義的分析モデルを示している。Nord(1991/2005²)はまず、テキスト機能の意味をより発展させ、翻訳過程の機能を中心に翻訳を「記録的翻訳 (documentary translation)」と「道具的翻訳 (instrumental translation)」に分け、それをまた翻訳の結果としての TT の機能を中心により詳しく分類している。

「記録的翻訳」とは、ST の著者と受信者との間で行われるコミュニケーションに対し、記録としての役割を果たす翻訳であり、ST の単なる再生産であるため、翻訳時には TT を考慮しない。その代わりに、ST に使われている具体的な表現や語順、ST 文化の文化的特性のような ST の特性が優先的に考慮される。「行別翻訳」、「直訳」、「文献学的翻訳」、「異国的翻訳」などがこのタイプに入る。

「道具的翻訳」とは、TTの文化で行われる新たなコミュニケーション行為のための独立的なメッセージを伝える道具としての役割をする翻訳であり、より自由な翻訳方法が取られ、TTはSTが持つコミュニケーションの目的と全く異なる目的を持つこともありうる。その際、TTの受信者は自分が他のコミュニケーション行為で既に使われたテキストを読んだり、聞いたりしていることを意識せずにTTを受け入れることになる。このタイプの翻訳には「機能維持翻訳」、「機能変更翻訳」、そして「機能相応翻訳」があり、STの形態的な要素はテキストの種類、ジャンル、使用域などに関するTT文化の規範と慣習に合わせて調整されるのが一般的である。

Nord(1997)はまた、翻訳教育に特に有用な機能主義の三つの要素として、「翻訳ブリーフ(Translation Brief)の重要性」と「ST分析の役割」、「翻訳問題の機能的階層化」を強調する。「翻訳ブリーフ」とは、クライアント側が求めているTTの機能についての必要な情報が得られる資料であり、その中には意図されたテキストの機能、TTの受容者、TTが受容される時間と場所、TTの媒体、TTの生産又は受容動機のような情報が含まれている。翻訳者は翻訳ブリーフを通じてTTにどの情報をどのように翻訳するか、TTがSTからどれくらい離れるようになるのかなどを評価する。

その後、翻訳者はSTの分析を通じて翻訳戦略の機能的優先順位を決定するが、その際、前提やテキストの構成、非言語的要素、語彙、超分節的要素、文章構造のような要素が分析に適用される。これを通じて翻訳の問題が具体化され、これについての階層的な優先順位が決められる。つまり、翻訳者はまず翻訳の機能を決定し、TTの受容者に合わせて変形されるべき機能的要素を決め、翻訳タイプに合わせたスタイルを選択し、最後に下位の言語レベルでのテキスト内の問題を解決することになる。

2.2. 翻訳のストラテジー

藤濤は、異文化との交流が避けられないグローバル時代においては翻訳現象も多様化しており、STとTTの対応関係を定める判断決定が必要になるとし、「その判断決定に必要な指針としても、また様々な翻訳現象を説明するための理論的枠組みとしても、コミュニケーション状況を踏まえた適切な翻訳行為を理論的に支えることのできる機能主義的翻訳理論の展開が今後ますます重要である」(藤濤 2007: 43)という立場から、日本語からドイツ語への翻訳時に生じる諸現象をはじめ、機能主義翻訳理論に基づいた翻訳の異文化コミュニケーション行為を様々な角度から比較分析している。

なかでも、藤濤(2004)では、翻訳において注がどのように表れ、そしてコミュニケーション上どのような機能を果たしているのかについて、吉本ばなな著『キッチン』のドイツ語訳と英語訳を例に分析を行っている。藤濤によると、ドイツ語訳では合わせて21項目の注が付けられている一方、英語訳では注が付けられていないが、それはドイツ語訳が注を活用して異文化の差を埋めているのに対し、英語訳では注以外の方法が取られているためであるとし、このような方法の差異が注を通じて、何を異文化としてTTに導入するかについての翻訳者の判断と意図、つまり翻訳戦略として表れていると言う。

また、藤濤(2005)では次のような「翻訳方法の一覧」を用いて村上春樹著『ノルウェイの森』のドイツ語訳を記述分析しているが、これはスコポス理論をベースにして、STに含まれる形式・内容・効果のうちどの要素を伝え、何を変更したかという視点から翻訳方法を分類したものである。

翻訳方法の一覧 (藤濤 2005: 32)

- (1) 移 植 : ST の綴りを導入する(形式)
- (2) 音 訳 : ST の音声面を導入する(形式)
- (3) 借用翻訳 : 語の構成要素の意味を訳す(形式+内容)
- (4) 逐 語 訳 : 一語一語に即して主にデノテーションを訳す(形式+内容)
- (5) パラフレーズ : 別の統語構造で同内容を表す(内容)
- (6) 同 化 : 目標文化内の別のものに置き換える(効果)³
- (7) 省 略 : ST の要素を削除する(結束性)
- (8) 加 筆 : ST に含まれていない要素を加える(結束性)
- (9) 解 説 : 注などによりメタ言語的に説明する(結束性)

藤濤は上記の翻訳方法のうち、(1)～(4)までをST中心の異化的効果を生かす方法、(5)～(8)までをTT中心の同化的効果を優先する方法、(9)解説はどちらとも併用される可能性がある方法に分類し、『ノルウェイの森』のドイツ語訳は異化的ストラテジー

³ 藤濤(2007: 141)では、この方法を「適応：目標文化に合わせて調整・変更する」と修正している。

ではなく、自然に読める同化的ストラテジーがとられており、異文化に対する翻訳者の積極的な関与が見られると結論付けている。

その他、藤濤(2006)では、ダウリング著 *The Cinderella Complex* とその二つの日本語 TT の比較分析を通じて、各翻訳者のスコポスの差がそれぞれの TT にどのように表れているのかを機能主義的立場から理論的に説明しており、また、藤濤(2007)では、スコ-pos理論を応用した翻訳の評価方法、つまり、個々の TT を翻訳のスコ-posと結束性及び ST への忠実性という三つの項目から評価分析する方法を提案し、ヘルマン・ヘッセ著『車輪の下』 *Unterm Rad* と二つの日本語訳を例にその妥当性を検討している。

とはいえ、藤濤(2007: 145)も指摘しているように、個々の TT がどのようなスコ-posを持っているのかを特定する基準が明確ではなく、藤濤の記述分析方法では、TT 内の個別箇所についての判断は可能であるものの、そのスコ-posがテキスト内で一貫性を維持しているのかどうかについての判断基準が見出せない。また、異なるスコ-posの下で翻訳が行われる場合、具体的にどのような箇所で翻訳戦略の選択が分かれるのか、そして、一つの ST が複数の外国語に翻訳された場合、言語・文化別に翻訳スコ-posの選択に差異が存在するのかについても十分考察されているとは言えない。

2.3. 自国化翻訳と異国化翻訳

スコ-pos理論の適用と密接な関連を有する翻訳戦略の一つとして、翻訳するとき、主に TT 文化に重点を置いて訳す方法である自国化翻訳(現地化翻訳)と、逆に ST 文化を中心に訳す異国化翻訳(他地化翻訳)が挙げられる。

この概念をはじめて取り上げた Schleiermacher は、ST の著者と TT の読者をどのように合わせるのかが真の問題だとし、本当(true)の翻訳者には、「できるだけ著者を動かずに読者を著者に近づけるか、それともできるだけ読者を動かずに著者を読者に近づけるか」(Schleiermacher 1813/1992: 41-2; Munday: 28)の二つの道しかない述べている。

Schleiermacher によって取り上げられたこの概念は Venuti(1995/2005²)の主張する「翻訳者の不可視性(invisibility of the translator)」とともに発展し、Venuti は「自国化翻訳(domestication)」と「異国化翻訳(foreignization)」という用語でこの二つの相反する翻訳戦略を説明している。

自国化翻訳とは、TT の読者には異国的で見慣れない ST の言語・文化的要素などを

TTの文化と慣習に合わせて翻訳する方法で、TTの文化に親しい表現に書き換えたり、TTの言語慣行に合わせて書くことで、TTの異質感を最小限にして読者の理解を高める戦略である。これに対し、異国化翻訳とは、読者がTTを読むとき、それがTTであることがはっきり分かるようにし、TTの読者にSTの文化の異質感を感じさせるように訳す方法で、TTの文化の言語・テキスト的慣行に従わない不自然な訳やSTの文化をそのまま残すなどのことでTTの異質感を最大化する戦略である。

Venuti(1998)はまた、現代の英米文化圏の翻訳状況について、自民族中心主義に基づいてSTの異国的要素を縮小して訳すことで、翻訳者の存在を見えなくする自国化翻訳に支配されていると批判し、STの異国的要素をなるべく保護・強調することで翻訳者の存在を可視化する異国化翻訳の方がより望ましいと主張している。

Venutiの自国化・異国化翻訳戦略はテキストの特定の部分に対する翻訳方法をはじめ、翻訳するテキストの選択から全体的な翻訳の方向を決める翻訳方式の選択までも含む包括的な概念であり、自国化戦略の下で翻訳されたテキストでは翻訳者の不可視性が目立ち、透明性(transparency⁴)も高まる反面、異国化戦略の下で訳されたテキストでは翻訳者の可視性が高まり、STの外来性が目立つことになる。

ただ、自国化と異国化とは相対的で非常に幅広い概念であるため、Venuti(1995)によれば、あるTTが自国化翻訳なのか異国化翻訳なのかの判断基準は時間と空間によって変わるが、TTがSTをTTの言語と文化にどれほど近づけているのか、またTTの文化の他のテキストとの差異をどれだけ明らかに表しているのかによって、そのTTが自国化翻訳なのかそれとも異国化翻訳なのかが決まると言う。

⁴ VenutiはTTが流暢に読まれ、TTの読者にSTの言語的・文体的特徴なしに透明に感じられることを翻訳の「透明性」という。

第3章 研究方法

本章では、本研究の分析対象になるテキストを紹介し、その選定理由を明らかにする。そして、本研究に適用している分析基準及び方法を詳しく説明する。

3.1. 分析対象

本研究では、日本語の ST とその韓国語訳(以下、KT という)そして英語訳(以下、ET という)を用いて分析を行う。具体的な分析テキストは、表 1 で示すとおりである。

原文(ST)	韓国語訳(KT)	英語訳(ET)
『ノルウェイの森』(1991) (村上春樹著、 以下村上と略す)	『Sangsil-uy sitay』 (喪失-の 時代) (ユ・ユジョン訳、2007 ³)	<i>Norwegian Wood</i> (Jay Rubin 訳、2003)
『キッチン』(1991) (吉本ばなな著、 以下吉本と略す)	『Khichin』 (キッチン) (キム・ナンジュ訳、1999)	<i>Kitchen</i> (Megan Backus 訳、1993)
『イン・ザ・プール』(2006) (奥田英朗著、 以下奥田と略す)	『In te phwul』 (イン ザ プール) (ヤン・オクグァン訳、2007)	<i>In the Pool</i> (Giles Murray 訳、2006)
『魔術はささやく』(1993) (宮部みゆき著、 以下宮部と略す)	『Maswul-un soksakin-ta』 (魔術-は ささや-く) (キム・ソヨン訳、2006)	<i>The Devil's Whisper</i> (Deborah Iwabuchi 訳、 2007)

表 1 分析テキスト

分析テキストとして文学作品を選んだ理由は、まず、藤濤(2007: 71)も述べているように、文学作品は実際に一つの ST に対して複数の TT が存在しているため TT 間の比較が比較的容易であることが挙げられる。また、文学翻訳は Reiss の言う表現型テキストタイプの翻訳という特性上、翻訳時にその内容や効果のみならず作家の文体や語彙選択などの形式的要素が優先されており、それぞれの文化から生まれたメタファーや前提などの文化的要因が他のどのジャンルよりの異文化コミュニケーションの障害になるうることから、ST と異なる文化から生まれた複数の TT の比較に適していると

思われるからである。

また、本研究は翻訳の異文化コミュニケーション機能に重点を置いているため、文学作品の中でも異文化コミュニケーションがもっとも成功していると思われるベストセラー作品を対象を絞り⁵、その中から、翻訳された時期、作家と翻訳者の性別、テキストの分量などを総合的に考慮し、分析テキストの選定を行った。

3.2. 分析方法

本研究では、翻訳の異文化コミュニケーション機能を探る上で、二つの翻訳スコパス、つまり、自国化翻訳と異国化翻訳という観点から分析を試みる。自国化翻訳とは、STの異国的で見慣れない要素をTTの文化と慣習に合わせて翻訳し、TTの異質感を最小限にして読者の理解を高める戦略であり、これに対し、異国化翻訳とは、STの異国的要素をTTにそのまま残して、それがTTであることがはっきり分かるように訳し、TTの異質感を最大化する戦略である(Venuti 1995)。

具体的な分析は、スコパス理論をベースにして翻訳方法を分類した藤濤(2005)の「翻訳方法の一覧」を用いて行う。その中で(1)移植、(2)音訳、(3)借用翻訳、(4)逐語訳をST中心の異国化翻訳方法、そして、(5)パラフレーズ、(6)同化、(7)省略、(8)加筆をTT中心の自国化翻訳方法と見なし、(9)解説はどちらとも併用される可能性があるため実例から判断することにする。

しかし、Venuti(1995)も指摘しているように、翻訳は結局STをTTの文化へ訳す行為であり、TTの他のところで自国化翻訳が行われてこそ、異国化された箇所が可視性を持つことができる。つまり、異国化はあるテキスト内で部分的に行われるものであり、J.K. ローリング著『ハリー・ポッター』シリーズのロシア語訳を分析したInggs(2003)もテキスト内で自国化・異国化翻訳の一貫性が見られないと主張しているように、実際のTTには自国化と異国化の要素が常に共存していると考えられる。

そこで、本研究では次のような手順に従って分析を行う。まず、各STとKT、ETを個別に対照し、それぞれ自国化・異国化翻訳が行われている箇所を収集する。その際、固有名詞や文化関連語彙⁶などの特定の部分ではなく、テキストの全文を対象に対

⁵ 韓国では日本語からの翻訳書が40.2%(2007年)に達しているのに対し、英語圏ではその数が少ないため、ベストセラーの選定は、まず韓国で1990年代後半から最近までベストセラーになっている作品を基準に、その英語訳が出ている作品の中から行った。

⁶ SLを使用する社会共同体の歴史・社会・経済・政治・言語習慣などをめぐる特定で固有

照・比較を行う。次に、KT と ET の違いを詳細に比較分析し、自国化・異国化翻訳の選択が一致していない箇所を収集する。そして、全てのテキストを分析した後、収集された資料を再分析し、自国化・異国化翻訳のカテゴリーを作成する。最後に、分類されたカテゴリーを基に、各カテゴリー別に自国化・異国化翻訳が実際どのように行われているのか、カテゴリー別の翻訳戦略の一貫性は見られるのか、そして、ST 文化圏との距離が TT の翻訳方法の選択に何らかの影響を及ぼしているのかを探る。

な文化から生まれた語彙(李 2005)。詳しくは4.8節で説明する。

第4章 分析と考察

本章では、第3章で説明した分析方法に基づいた分析の結果をまとめ、自国化翻訳と異国化翻訳という観点からの考察を試みる。

分析の結果、全てのテキストで共通に見られる自国化・異国化翻訳の選択の分かれ目は、大きく (1) 題目・目次 (2) 呼称・人称ダイクシス (3) 交感的言語使用・文体 (4) 非言語コミュニケーション (5) 社会文化的慣習 (6) 慣用表現 (7) 固有名詞・地名 (8) 文化関連語彙 の八つのカテゴリーに分類することができた⁷。以下、各々のカテゴリー別に具体例を挙げながら考察を進める⁸。

なお、上記のカテゴリー以外に、段落の構成や直接・間接話法、強調点のような記述的要素も自国化と異国化を判断する要素になりうると思われるが、これらはテキスト別にばらつきが多く、共通点が見られなかったため、本研究では考慮しないこととする。また、テキストの分析において、誤訳の有無など翻訳の品質についても考慮しないことを予めお断りしておきたい。

4.1. 題目・目次

文学作品の翻訳において題目と目次はTTのスコープが最初にかがわれる箇所であり、より効果的な異文化コミュニケーションを図るための第一歩でもあると思われる。

まず、題目と目次に自国化翻訳戦略と異国化翻訳戦略の差が明らかに表れている例を見ると、例(1a)で見られるように、村上春樹の『ノルウェイの森』のKTはその題目を『Sangsil-uy sitay(喪失の時代)』に変えて、目次にも「Ceylcang 18nyen cen alyenhan chwuek sok-uy naokho(第1章 18年前のおぼろげな追憶の中の直子)」のように各章ごとに章タイトルを加筆している。これに対し、ETでは題目を *Norwegian Wood* と逐語訳してから、目次にも「第1章」のように日本語をそのまま移植して訳している。

⁷ この分類は説明の便宜上のもので、理論的に区別しなければならないわけではない。

⁸ 各テキストの例文は作家名のみで示し、括弧内の数字は引用ページ番号を表す。また、例文のボールド体と下線は筆者によるもので、STとKTの強調点やETの斜字体などの表記は原文のものである。なお、KTのローマ字表記はYale式に従い、例文には日本語のグロス(逐語訳)を付けている。ただし、グロスは形態素の切れ目ではなく、意味が通じる単位ごとに付けることにする。

(1a) [ST] 『ノルウェイの森』

第一章

[KT] 『sangsil-uy sitay』

喪失-の 時代

Cey 1 cang 18nyen cen alyenhan chwuek sok-uy naokho

第 1 章 18 年 前 おぼろげな 追憶 中-の 直子

[ET] *Norwegian Wood*

第 1 章

KT の題目は、おそらく例(1b)の箇所由来と思われるが、ここでも KT では ST と ET では見られない加筆が行われていることが分かる。

(1b) [ST] 失われた時間、死にあるいは去っていった人々、もう戻ることのない思い。

(村上、8)

[KT] ilhepelin sikan, cwukess-kena ttonun salacye-kan salam-tul,

失われた時間 死んだ-か あるいは 去って-いた 人-たち

iceyn tolikhil-swu epsnun cinan chwuek-tul,

今や 取り返し-の つかない 去った 追憶-ら

kuliko ku motun sangsil-uy aphum-tul-ul. (14)

そして その 全ての 喪失-の 苦しみ-ら-を

[ET] times gone for ever, friends who had died or disappeared, feelings I would never know again. (1)

韓国では、「万国著作権条約」の発効が 1987 年 10 月 1 日であったため、『ノルウェイの森』の韓国語訳は『Sangsil-uy sitay』が出版される前に、既に『Noluweii-uy swuph(ノルウェイ-の森)』という ST と同じ題目で複数の出版社から出されていたが、あまり注目されていなかったという。しかし、1989 年にそのタイトルを『Sangsil-uy sitay』に変え、新たに翻訳・出版されてからはベストセラーを超え、今でもロングセラーとして韓国社会で受け入れられている。

また、尹(2008)が述べているように、『Sangsil-uy sitay』からはじまった「ハルキ・シンドローム」は、村上春樹という作家個人の人気に止まらず、その後の日本文学ブームの火付け役にもなっていることから、翻訳戦略の選択が異文化コミュニケーションの成功に影響していることがうかがえる。

このような自国化翻訳方法は ET にも見られる。例(2)を見ると、宮部みゆきの『魔術はささやく』が KT では書名も目次もそのまま訳されているのに対し、ET では題目を *The Devil's Whisper* に変更し、目次でも「最終章」を Epilogue に変え、章タイトルを省略していることが分かる。

これはおそらく、ET では、ST がミステリー小説であるとの特性から、ET 文化圏においてミステリー的効果がより高められる題目に変更し、また目次も最初のプロローグに合わせて Epilogue だけにするという自国化戦略が取られているためであると思われる。一方、KT では ST の題目が韓国語の文法としては不自然だが、そこから得られる異質的効果をそのまま生かして訳すという異国化戦略が用いられている。

(2) [ST] 『魔術はささやく』

プロローグ

最終章 最後の一人

[KT] 『Maswul-un soksakin-ta』

魔術-は ささやく

Phulolloku

プロローグ

Macimak cang Macimak han salam

最後 章 最後 一人

[ET] *The Devil's Whisper*

Prologue

Epilogue

さらに、奥田英郎の短編集である『イン・ザ・プール』にも、各短編のタイトルが例えば、ST の「フレンズ」に対して、KT は「phuleyncu(フレンズ)」、ET は「Cell」と

翻訳したり、また ST の「いてもたっても」を KT が「ileci-to celeci-to(こうする-も ああする-も)」、ET が「Double Check」と訳すなど、KT では異国化翻訳法である音訳と逐語訳が、そして ET では自国化翻訳法である同化のような異なる翻訳方法が取られていた。

このように題目と目次は、異文化コミュニケーションを成功させるための、翻訳者あるいは出版社の翻訳戦略が明らかに見られる箇所であり、自国化翻訳と異国化翻訳という TT のスコプスの差が発生する最初の分かれ目でもあると考えられる。

ここで、タイトルと目次の翻訳方略についてまとめておく⁹。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	0	2	0	1(3)	0	1	0	0(1)	0	4(4)
ET	0(1)	3	0	0	0	1(3)	0	0	0	4(4)

表 2 題目・目次の分析結果

4.2. 呼称・人称ダイクシス

日本語には様々な呼称と人称ダイクシス(person deixis)が発達しており、これらは話し手と聞き手との間の複雑な関係を構築する重要な要素の一つになっている。特に文学作品の中では、呼称と人称ダイクシスが登場人物のキャラクター作りやコンテキスト内の結束性の維持など、暗黙の情報提供に使われている。

とはいえ、Baker(1992)も述べているように、翻訳においては、これらはいわゆる「語用論的等価(pragmatic equivalence)」が優先される箇所であり、実際のテキストにも呼称と人称ダイクシスは ST での使い方に拘らず、KT、ET ともにそれぞれの社会文化に合わせた自国化翻訳が行われている。以下、具体例を挙げてそれぞれの翻訳方法を分析する。

4.2.1. 呼称

呼称の翻訳方法の差が見られるところは、大きく「人名+敬称」と「肩書き」に分けられる。まず、例(3)のような「人名+敬称」の場合、主人公の「ワタナベ・トオル」

⁹ 括弧内の数字は目次の翻訳方法を示す。

を、主人公の彼女である直子は「ワタナベ君」と呼んでいるが、KTでは同じ年の恋人同士の間では敬称を付けないため、「Wathanapey」の音訳だけで訳している。一方、ETでは彼氏のことはファースト・ネームで呼んだ方が自然であるとの判断から、「Toru」というファースト・ネームで置き換える同化の方法が取られていると思われる。

(3) [ST] 「ねえワタナベ君、私のこと好き？」(村上、18)

[KT] “Ce, **Wathanapey**, cengmal nal cohahay?” (23)

あの ワタナベ 本当に 私を 好き

[ET] “Tell me something, **Toru**,” she said. “Do you love me?” (9)

同じく例(4)でも、主人公と同じ寮に住んでいる二つ年上の永沢という男性のことをSTでは「永沢さん」と呼んでいるが、KTでは「Nakasawa senpay」と音訳にKTの文化に合わせた敬称を加えて訳しており、またETでは「Nagasawa」と名前だけを音訳している。

(4) [ST] 永沢さんはいくつかの相反する特質をきわめて極端なかたちであわせ持った男だった。(村上、61)

[KT] **Nakasawa senpay**-nun myech kaci sangpan-toynun thukcil-ul,

永沢 先輩-は 何 種類 相反-する 特質-を

acwu kuktan-cek-in hyengthay-lo kacko iss-nun salam-iess-ta. (61)

非常に 極端-敵-な 形態-で 持って いる 人-だつ-た

[ET] There were sides to **Nagasawa's** personality that conflicted in the extreme. (40)

さらに、例(5)を見ると、義妹のことをSTでは「和子さん」あるいは「あなた」と呼び、姑のことは「お姑さん^{かあ}」と呼んでいるが、KTではまず「和子さん」は「Kacukho akassi」と名前の音訳にKT文化で義妹を呼ぶときに使われる敬称を加筆して、姑のことは同じく「emenim」と逐語訳で訳している。これに対して、ETではそれぞれ「You」

と「your mother」のように二人称代名詞を用いた同化が行われている。

- (5) [ST] 電話をかければ、和子さん、いらっしゃいと、兄嫁は言うだろう。お姑さんだってもう若くはないんだし、このごろはまた足が痛むみたい。あなたの方から顔を見せに来てくれないと会えなくて、お姑さん寂しがっていらっしゃるわ。(宮部、165)

[KT] Cenhwá-lul kel-myen ‘kacukho akassi, yeki-lo osey-yo’ lako
電話-を かける-と 和子 お嬢さん ここ-に いらっしゃいと
sayenni-nun malhal kes-ita. Emenim-to icey celmci-nun anhu-si-ko,
兄嫁-は 言う だろう お姑さん-も もう 若く-は ない-[尊敬]-し
yocum-un tto tali-ka aph-si-nka pwa-yo. **Akassi** ccok-eyse
このごろ-は また 足-が 痛む-[尊敬] みたい お嬢さん 側-から
chaca-wa cwuci anhu-myen mannal swu epsese
訪ねて-来て くれ ない-と 会う ことが できなくて
emenim-to ssulssulhay hasey-yo. (157)
お姑さん-も 寂しがって いらっしゃる

[ET] Whenever she called, her sister-in-law never failed to invite her to come visit. *You ought to come see your mother more. Her legs have been hurting, and she can't make the trip to go see you. I know how she misses you.* (105)

次に、「肩書き」の呼称の翻訳方法を比べてみると、例(6)では、マユミという看護婦に対して、男子高校生の主人公が ST では「看護婦さん」という職名を転用した呼称を使っているが、KT では「kanhosa nuna(看護師姉さん)」と肩書きに KT 文化に合わせた敬称を加筆しているのに対し、ET では「Mayumi」と名前を用いた同化の方法を用いている。

- (6) [ST] 「看護婦さんは、友だち、いるんですか」(奥田、220)

[KT] “**Kanhosa nuna-nun chinkwu isse-yo?**” (242)

看護師 姉さん-は 友だち いますか

[ET] “**Mayumi, do you have any friend?**” (178)

なお、「先生」のようにさまざまな職業の肩書きに使われている呼称の場合は、例(7)で見られるように、ETでは異文化の差を埋めるための工夫が読み取られる。例(7)は、「石田先生」に会うようにと言われた主人公の「あなたは直子の担当のお医者さんなんですか？」(村上、176)という質問に対するレイコさんという人物の答えの一部であるが、多様に使われている日本語の「先生」という肩書きに対して、「**Doctor**」という肩書きが日本語より狭い範囲で使われている英語の場合は、例(7)のETのような加筆などの方法が必要になる。これに対し、KTでは「**sensayng-nim(先生-様)**」という肩書きが日本語とほぼ同じように使われているため、特に問題にならず、逐語訳に敬称を加えて訳している。

(7) [ST] 「ああ、それね。うん、私ね、ここで音楽の先生してるのよ。だから私のこと**先生**って呼ぶ人もいるの。(…)」(村上、176)

[KT] “Aa, kulehkwun. Na-nun yekise umak sensayng nolus-ul hako isse.

ああ そうね 私-は ここで 音楽 先生 役-を して いる

Kulayse na-lul **sensayng-nim-ilako** pwulunun salam-tul-to isse. (…)” (158)

だから 私-を 先生-様-と 呼ぶ 人-たち-も いる

[ET] “Oh, I get it. No no no, I teach music here. It’s a kind of therapy for some patients, so for fun they call me ‘**The Music Doctor**’ and sometimes ‘**Doctor Ishida**’. (…)” (125)

このように呼称の翻訳にはKT、ETともに具体的な方法の差はあるものの、ほぼ自国化の戦略が取られているが、例えば例(8)と(9)のようにSTの呼称を音訳することで、可視的な異国化の効果を高めることもある。

- (8) [ST] a. 「安川広美さんだよね」(奥田、129)
 b. 「広美さん、もちろん独身だよね」(...) 広美さん、だって？ (131)
 c. 「広美ちゃんは、どうして不眠になったのかな」
 ちゃん、になっているー。(131)

- [KT] a. “**Yasukawa hilomi ssi**” (13)
 安川 広美 氏
 b. “**Hilomissi** mwullon toksin-ikeyssci?” (...) Hilomi ssi, lako? (15)
 広美 氏 勿論 独身-だよね？ 広美 氏 だって
 c. “**Hilomiccang-un** way pwulmyencung-ey kellyessul-kka?”
 広美ちゃん-は なぜ 不眠症-に かかったの-かな？
 Kapcaki way ‘ccang’-iya. (16)
 いきなり なぜ ちゃん-なの

- [ET] a. “You’re **Hiromi Yasukawa**, right?” (106)
 b. “And you are, of course, single, **Hiromi**?” (...)
 Why was he calling her by her first name? (107)
 c. “So, **Hiromi**, **my love**, why have you got this insomnia?”
 Now she was “his love”, was she? (107)

- (9) [ST] 「テッちゃん、再婚しないの？」(奥田、107)

- [KT] “Yocum ettehkey cinay? Cayhon an hani?” (110)
 最近 どう 過す 再婚 ないし

- [ET] “So, **Tetchan**,” she said, **calling him by his childhood nick-name**, “you don’t plan to remarry?” (89)

例(8)の ST では相手に対する呼称が徐々に変化していく様子が見られるが、KT の場合、「Hilomi」と訳すだけでも ST とほぼ同じ効果が得られるにもかかわらず、「ちゃん」という ST の呼称を導入することで、異化的効果を生んでいる。韓国では例えば『クレヨンしんちゃん』が『khuleyyong sinccang』と翻訳されているなど、人気漫画やアニメー

ションなどを通じて「ちゃん」という日本語の呼称がある程度知られているため、ここでも ST の呼称を保持して異化的効果を与えていると思われる。また、例(9)の ET も加筆はしているものの、「Tetchan」と音訳することで ST の異化的要素を残している。以下、表 3 に呼称の分析結果を示す¹⁰。この表を見る限り、KT と ET に大きな差はないものの、KT は異国化翻訳の、ET は自国化翻訳の方略を使うことがやや多いと言える。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	0	101	0	67	0	105	6	5	0	284
ET	0	95	0	33	0	141	13	6	0	288

表 3 呼称の分析結果

4.2.2 人称ダイクシス

人称ダイクシスの翻訳には、方法としては逐語訳が最も多く用いられているが、そこには ST での使い方がほぼ反映されておらず、特に二人称代名詞の翻訳には各 TT の方法に差が目立つ。ET の場合、英語には二人称代名詞の敬称による区別がないため、日本語のほぼ全ての二人称代名詞を「you」で訳しており、場合によっては同化や省略も若干見られる。一方、韓国語では二人称代名詞は主に親しい関係か目下の人に対してしか使われておらず、普段省略されたり、その場に適切な呼称で代替されるため、KT では同じ ST の二人称代名詞でもその場の状況や話し手と聞き手との関係などによって、様々な翻訳方法が用いられている。

まず、「あなた」の例から見ていくと、KT でも例(10)のように夫婦の間で使われている ST の「あなた」の場合は、ほぼ同じように使われる「caki」という二人称代名詞で訳されているが、例(11)と例(12)のように KT においてより自然な呼称で置き換えられている場合が多い。

- (10) [ST] 「**あなた**も独身時代は賞味期限の切れた牛乳飲んでも平気な人だったじゃない」(奥田、33)

¹⁰ 二つ以上の方法が用いられた場合は、それぞれ一回ずつカウントし、同じ呼称が繰り返し出る場合は、一回にカウントした。カウント方式は以下同様とする。

[KT] “**Caki**, toksin siceI-eynun yuhyo-kikan cinan wuyu-to
 あなた 独身 時代-には 有効-期限 過ぎた 牛乳-を
 amwulehci anhkey masyess-canha.” (158)
 どうとも なく 飲んだ-じゃない

[ET] “When **you** were single, you were the sort of person who was quite
 happy to drink a carton of milk past its sell-by date.” (29)

例(11)では、レイコという人物が初対面の年下の男性である主人公を「あなた」と呼んでいるが、KTではそのような場合に「あなた」に当たる二人称代名詞を使うのは不自然であるため、「haksayng(学生)」という主人公の身分を用いた同化の方法が取られている。

(11) [ST] 「あなたって何かこう不思議なしゃべり方するわね」と彼女は言った。
 「あの『ライ麦畑』の男の子の真似してるわけじゃないわよね」(村上、184)

[KT] “**Haksayng-un** cham isanghan malthwu-lul ssuney” hako
 学生-は 非常に 不思議な しゃべり方-を 使う と
 Leyikho ssi-ka malhayss-ta.
 レイコ さん-が 話した
 “≪Homilpath-uy phaswukkwun≫ ey naonun namca cwuinkong-uy
 ライ麦畑-の 番人 に出る 男 主人公の
 hyungnay-lul nayko issnun ken anil theyko.” (164)
 真似-を して いるの ではない よね

[ET] “**You**’ve got this funny way of talking,”she said. Don’t tell me you’re
 trying to imitate that boy in *Catcher in the Rye*?” (131)

また、例(12)でも同じく、STの「あなた」を「sachukhi ssi(さつきさん)」のように名前に敬称を加えたTTにより自然な呼称に換えて訳している。一方、「あたし」の場合はKTでも日本語にほぼ対応する「na」で逐語訳している。

(12) [ST] 「あなたとあたしは並んでいてもお互いが見えなくなるかもしれないし、全く違うものを見るでしょう」(吉本、192)

[KT] “Na-lang sachukhi ssi-ka nalanhi se isse-to selo poi-ci anhul-cito
私-と さつき さん-が 並んで 立っ て いて-も 互い 見-え ない-かも
molu-ko, cenhye talun kes-ul pol swu-to issul ke-yeyyo.” (186)
しれない-し 全く 違う もの-を 見る こと-も ある でしょう

[ET] “You and I, although we’ll be standing side by side, probably won’t be able to see each other, and we won’t be seeing the same things.” (144)

次に、「君」の例を見ると、例えば例(13)のように目上の人から目下の人に対する発話では KT でも ST の「君」と同じように使われている「ne」で逐語訳されているが、例(14)と例(15)では「君」がそれぞれ別の呼称で置き換えられたり、省略されている。

(13) [ST] 「ええと、君と君と君」それぞれを指で差す。(奥田、137)

[KT] “Ei, ne, ne, kuliko ne.” sonkalak-ul sey pen wumcikyess-ta. (22)
おい 君 君 そして 君 指-を 三 回 動い-た

[ET] “Right then. You, you, and you,” he announced, pointing at each of the girls in turn. (112)

例(14)は、大型スーパーの屋上で飛び降り騒ぎを起こしている女の子に対しての発話であるが、ST では書籍コーナーのチーフで 30 歳の男性である高野という人物がその女の子を「君」と呼んでいるのに対し、KT ではその場の状況と店の客と店員という関係などから尊敬語とともに女の子に「akassi(お嬢さん)」という呼称を使っている。

(14) [ST] 「(...)僕はここの店員でね、名前は高野。たかのはじめ。はじめは数字の一と書くんだよ。君の名前は？よかったら教えてくれないかな」(宮部、197)

[KT] “(...) Na-nun yeki cemwen-intey, ilum-un Takhano-yey-yo. Takhano Hacimey.
 僕-は ここ 店員-で 名前-は 高野-です たかの はじめ
 Hacimey-nun swusca il — ilako ssuc-yo. **Akassi** ilum-un?
 はじめ-は 数字 1 — と 書きます お嬢さん 名前-は
 Kwaynchanhtamyen kaluchye cwullay-yo?” (188)
 よかったら 教えて くれますか

[ET] “(...) My name is Takano and I work here. Hajime Takano. I write my
 name with the character for ‘one’. What’s **your** name? Won’t you tell
 me?” (124)

また、例(15)でも ST では夫婦間の会話の中で夫が妻を「君」と呼んでいるのに対し、
 KT では二人称代名詞を省略して「ei(おい)」という間投詞を加筆して訳すなど、発話
 の状況や話し手と聞き手との関係によって様々な方法が用いられている。

(15) [ST] 「千葉すずの無念をおれが代わりに晴らすって？」
 「君、どっからそういう発想が出てくるわけ」(奥田、18)

[KT] “Ollimphik-ey chwulcen moshan Chipa Sucu-uy han-ilato tangsin-i
 オリンピック-に 出場 できなかった 千葉 すず-の 恨み-でも あなた-が
 phwule cwul sayngkak-iy?” swuhwaki cephyen-uy moksoli thon-i
 晴らしてくれる つもり-なの 受話器 向こう-の 声 トーン-が
 han okthapu nophacyess-ta.
 — オクターブ 高くなる
 “**Ei**, etise kulen yume-ka nawa?” (141)
 おい どこから そんな ユーモア-が 出る

[ET] “Trying to win the Olympic swimming medal that Japan never gets, is
 that it?” “Where do **you** get such crazy ideas?” (16)

加えて、「おまえ」の例を見てみると、例(16)は例(15)と同じ夫婦間の会話であるが、

夫婦喧嘩のとき、妻に対して「おまえ」と呼ばないことを約束していた夫が妻を「おまえ」と呼んでしまう場面が出てくる。まず **KT** の場合、「**ne**」はこの場面の「おまえ」とほぼ同じように使われる二人称代名詞であるため、そのまま逐語訳している。これに対し、**ET** ではこの場合「**you**」だけでは **ST** の「おまえ」が与える効果が伝えられないため、「おまえ」を「**woman**」に置き換えて訳す同化が用いられている。他にも、「てめえ」を「**shithead**」と訳すなど、**ET** でも二人称代名詞の翻訳にそれなりの工夫が見られる。

(16) [ST] 「うるさいんだよ、おまえは」「あっ、『おまえ』って言った」(奥田、43)

[KT] “**Ne, mal-i com manha.**” “**E, ne, lako haysse?**” (168)

おまえ 口数-が ちょっと 多い あっ おまえ と した

[ET] “**Woman, will you shut up?**” “**Don’t you ‘woman’ me.**” (37)

一方、例(17)のように人称ダイクシスに含意が含まれている場合は、**KT**、**ET** ともに省略の方法が取られている。これは彼女を交通事故で亡くし、彼女の形見のセーラー服を着て学校に通っている高校生の男の子が、そのことについて周りから何か言われていないかという質問に対して答える場面であるが、**ST** の「ワタシ」に込められている含意、つまり、自分のことを「ワタシ」と言う普通ではない高校生の男の子というキャラクターの情報を異なる言語体系を持つ **TT** で人称ダイクシスを使ってそのまま伝えるのはなかなか容易なことではない。

そのため、**KT** ではまず **ST** の「ワタシ」を省略し、発話の内容を変えて次の文章までも省略するという方法が取られており、**ET** でも「ワタシ」は「**I**」で訳されているものの、次の文章は **KT** と同じく省略されている。

(17) [ST] 「いや、それがワタシね。」彼は言った。

彼は昔から自分のことをワタシと言うのだ。(吉本、162)

[KT] “**Ani, kulen key naa**” **ku-ka kulehkey malhayss-ta.** (156)

いや そういう のが いい 彼-が そのように 話し-た

[ET] “No, they know that’s just how I am.” (120)

以上の分析結果からも分かるように、呼称と人称ダイクシスの翻訳には方法としては異国化翻訳と見なされる逐語訳が最も多く取られているが、そこから ST の異化的要素が伝わっているとは言い難く、むしろ ST での使い方に拘らず、それぞれの TT の社会文化に合わせた自国化翻訳の傾向が強いと思われる。この点は表 4 から明らかである。

これらの要素は各文化別に異なる語用論的法則に従って使われているため、より効果的な異文化コミュニケーションのためにも自国化戦略が優先的に取られていると考えられる。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	0	0	0	191	0	60	38	6	0	295
ET	0	0	0	218	0	38	19	12	0	287

表 4 人称ダイクシスの分析結果

4.3. 交感的言語使用・文体

Nord(1997)は、Reiss のテキストタイプ別翻訳理論の出発点になった、Bühler の「organon model」で取り上げられた言語の三つの機能（叙述機能、表出機能、訴求機能）に加え、もう一つの言語の機能として「交感的機能(phatic function)」を提案している。交感的機能は発信者と受信者の間の接触(contact)を成立・維持させることを目標にしており、例えば会話を始めるための慣習的な決まり文句などがこれに当たる。

このような交感的機能を果たしている「交感的言語使用(phatic communion)¹¹」は、実際の使用において文体(style)と密接に関連しつつ具体化されており、当然のことながら文化によってその形も、使われる場面も異なる。

そのため、交感的言語使用の翻訳にも各 TT によって様々な方法が取られているが、大きな傾向としては KT、ET とともに ST での使い方よりは TT 文化に合わせた自国化戦略に基づいてその交感的機能を生かすための調整が行われている。

¹¹ 交感的言語使用(phatic communion): 挨拶や決まり文句、社交辞令など、人と人との共感し合い、友好的社会的雰囲気醸し出すためのことばによる交わり。

特に日本語の場合、非常に複雑で高度に発達した交感的言語使用が行われており、その上、例えば「すみません」や「どうも」のように発話に使われている「ことば」が様々な場面で、しかもそれぞれ異なる意味で使われているという特徴がある。つまり、日本語 ST の翻訳の場合、ことばの表面には表れていない含意を探り、その機能を明確に伝えることが強く求められるが、実際の TT でもそのための操作や変更が KT はもちろん特に ET でもしばしば見られる。以下、具体例を挙げながらそれぞれの翻訳方法を分析する。

まず、例(18)から例(20)の「よろしく」の例から見ていくと、例(18)は祖母の葬式の後、引っ越し先を探しているみかげという人物に、雄一というほとんど初対面の人が当分自分の家で過すよう誘う場面である。ここでの「よろしく」は ET では「All right, then, good.」と ST とほぼ同じ機能を持つと思われる別のことばを用いて訳されているが、KT ではこのような場面では「よろしく」のようなことばの使用がむしろ不自然であるため、省略されている。さらに、KT では初対面というその場の人物間の関係から ST より発話の丁寧度が高まっている。

(18) [ST] 「じゃ、よろしく。みかげさんが来てくれるのをぼくも母も楽しみにしているから。」(吉本、11)

[KT] “**Kulem**, Mikhakey ssi-ka wa-cwu-kil, emeni-na ce-na kitali-ko
それでは みかげ さん-が 来て-くれる-のを 母-も 私-も 待っ-て
issul theynikka-yo” (11)
いる から-[丁寧語尾]

[ET] “**All right, then, good.** Mom and I are both looking forward to your coming.” (6)

また、例(19)は一緒に住むことになったみかげに対する初対面の雄一の母親の発話であるが、ここでの「よろしく」は KT でも ST とほぼ同じように使われていることから「cal pwuthak-hay-yo」と逐語訳に加え、例(18)と同じく ST より丁寧度を高めて訳されている。これに対し、ET では「よろしく」に当たる逐語訳はできないため、その場面に相応しいと思われる「We're so pleased to have you here」という表現で置き換えら

れている。

さらに、ET でも KT と同様丁寧度が高まっている点や、「so」が付け加えられているなどのことから、ここで見られる各 TT の翻訳戦略には、元々は父親だったが性転換手術を受け女性になり、非常に女性らしい話し方をする ST のキャラクターの文体までも考慮に入っていることがうかがえる。

(19) [ST] 「明日からよろしくね。」(吉本、17)

[KT] “Nayil-pwuthe cal pwuthak-hay-yo” (18)

明日-から よく 付託-する-[丁寧語尾]

[ET] “We’re so pleased to have you here,” (11)

また、例(20)の「よろしく」の翻訳には ST では「ヨロシク」だけで伝えられる意味が、両 TT ではより明確に加筆されていることが見られる。例(20)は本来ならば一緒にする予定だった仕事を抜けるために相手に電話でお願いをする場面であるが、KT では「ヨロシク」を逐語訳だけで済ませず、「calhay cwe(よくしてくれ)」に「pwuthakhay(頼む)」を加えて訳している。また、ET ではより明確に「I’m counting on you. Thanks」が付け加えられている。

(20) [ST] 「いつもの感じでヨロシクね」と言ってターミナル駅へと急いだ。

(奥田、25)

[KT] “Nul hatusi, calhay cwe, pwuthakhay” hako-nun setwulle

いつも するように よくして くれ 頼む して-は 急いで

yek-ulo hyanghayss-ta. (149)

駅-へ 向かった

[ET] “Just shoot it the way you always do. I’m counting on you. Thanks,” he told him. Then he hurried off to the train station. (22-3)

次に見る例(21)と例(22)は、それぞれはじめて人の家を訪問するときと部屋などに入

るときに使われる挨拶の例である。まず、KTの場合、韓国語には例(21)の「おじゃまします」に対応する挨拶がないため、例(22)の「失礼します」の逐語訳に相当する「sillyey-hapnita」という表現が使われている。このような同化の方法は ET でより目立っており、ET では例(21)の「おじゃまします」が「Thanks」へ、そして例(22)の「失礼します」は「Good morning」へと、各々の状況に合わせた自然な表現に置き換えられている。

(21) [ST] おじゃまします、と上がったそこは、実に妙な部屋だった。(吉本、13)

[KT] **Sillyey-hapnita**, lako mal-hamye tule-sen kukos-un,
失礼-します と 言い-ながら 入-った そこ-は
cengmal-ici myo-han kongkan-iessta. (14)
本当-に 妙-な 空間-だった

[ET] “**Thanks.**”I stepped inside. The room was truly strange. (8)

(22) [ST] 失礼します、と言って中に入る。(奥田、129)

[KT] **Sillyey-hapnita**, hako an-ulo tulekass-ta. (13)
失礼-します と 中-へ 入-った

[ET] “**Good morning,**”she said as she went in. (105)

続いて、例(23)と例(24)の「どうぞ」の翻訳においても、TT ではその意味がより具体的になっている。まず、例(23)での椅子を勧める医師の「どうぞ」という発話は、KTでは「a, ili wayo, ili-lo(あ、こっち来て、こっちへ)」と ST より具体的になっており、ETでも「Nice to meet you, come on in」と具体的な動作の指示に加え挨拶まで加筆されている。

(23) [ST] 「どうぞどうぞ」医師が相好をくずし、椅子を勧めた。(奥田、8)

[KT] “A, ili wayo, ili-lo.” uysa-nun elkwul-ey phwukun-han wusum-ul
あ こっち 来て こっちへ 医師-は 顔-に 和やか-な 笑み-を
ttimyen-se uyca-lul kwenhayss-ta. (130)
浮かべ-ながら 椅子-を 勧め-た

[ET] “Nice to meet you, come on in,” said the doctor, smiling and indicating a seat. (8)

また、例(24)の「どうぞ」を見ても、KTでは「hwanyeng-hanta(歓迎する)」、そしてETでは「Sure, that'd be good」になっているなど、発話の意味がより明確に訳されている。

(24) [ST] 「今度遊びに行くね」 もちろん「どうぞ」と答えた。(奥田、278)

[KT] “Taumeiy han-pen nolle kalkey.” Mwullon hwanyeng-hanta-ko
今度 一度 遊びに 行く もちろん 歓迎-する-と
taytaphayss-ta. (309)
答え-た

[ET] “I'll stop by for a drink sometime soon.” “Sure, that'd be good,” Yoshio said. (224)

加えて、例(25)の「いい」の場合を見ると、この例で使われている二つの「いい」は最初の「いい？」が発話をはじめるときの注意を促す機能、そして最後の「いいかい？」は話した内容の確認という機能をそれぞれ果たしている。この二つの「いい」をまずKTでは「cal tule-yo(よく聞いてください)」と「alass-cyo(分かりましたか)」のようにKTでの自然な発話に合わせて訳しており、ETでも「Ready?」と「Got it?」のようにその意味をより明確に訳しているなど、両TTともにそのような「いい」の各々の機能がよく保持できていると考えられる。

(25) [ST] 「いい？ 今から少し、ここの次元や空間や時間や、そういったものが揺

れたり、ずれたりする。(…)決して声を出したり、橋を渡らないで。いいかい？」(吉本、192)

[KT] “**Cal tule-yo.** Cikum-pwuthe yeki-uy chawen-kwa kongkan-kwa
よく 聞いて-[丁寧] 今-から ここ-の 次元-と 空間-と
sikan-kwa, kulen kes-tul-i huntulli-kena, ekus-nal keyey-yo.
時間-と そういう もの-ら-が 揺れ-たり ずれ-たり する-[丁寧]
(...) Celtaylo soli-lul cilu-kena, tali-lul kenne-myen antway-yo.
決して 声-を 出し-たり 橋-を 渡る-と だめ-[丁寧]
Alass-cyo?” (186)
わかった-[丁寧]

[ET] “**Ready?** What’s going to happen next is, the dimension we’re in-time, space, all that stuff-is going to move, shift a little. (...)Whatever you do, you mustn’t say anything, and you mustn’t cross the bridge. **Got it?”** (144)

なお、挨拶や決まり文句などの他に、例えば例(26)の「ふうん」や例(27)の「ほら」のような発話も TT ではその意味が詳しく加筆されている傾向が見られる。これはとりわけ ET でよく見られる特徴であるが、まず例(26)の場合、ST の「ふうん」が KT では「kulehkwun(そうね)」と ST と同様に話し手の意図がそれほどはっきり示されていないのに対し、ET では「That’s strange」と翻訳者が判断した話し手の発話意図が明確に表れている。

また、例(27)を見ても、発話をはじめるときの ST の「ほら」が KT では「ke isscanha」とほぼ逐語訳になっている一方、ET では「Oh come on, you know perfectly well what I mean」とその状況の流れに合わせて詳しい加筆が行われている。

(26) [ST] 「(...)直子、私のことあなたに教えなかった？」僕は首を振った。「ふうん」とレイコさんは言った。(村上、176)

[KT] “(...) Naokho-ka nay yaykil haksayng-eykey anhayssna?” Na-nun kokay-lul
 直子-が 私 話を 学生-に しなかったの 僕-は 首-を
 huntulesst-ta. “**Kulehkwun**” hako Leyikho ssi-nun malhayss-ta. (158)
 振った そうね と レイコ さん-は 言った

[ET] “(...)Didn’t Naoko tell you about me?” I shook my head.
 “**That’s strange,**”said Reiko. (125)

(27) [ST] 「ほら、最近よくテレビでカウンセラーが患者の悩みを聞いて励ましたり
 するシーンとかあるじゃない。(…)」(奥田、11)

[KT] “**Ke isscanha** yocum theyllepipicen-eyse khawunsulle-ka hwanca-uy
 ほら 最近 テレビ-で カウンセラー-が 患者-の
 komin-ul tut-ko kyeklye-hay cwunun cangmyen. (...).” (134)
 悩み-を 聞いて 励まして くれる 場面

[ET] “**Oh come on, you know perfectly well what I mean.** They’re on TV all
 thetime: some counselor listening to a patient’s worries, then giving
 him wise words of encouragement. (...).” (11)

以上をまとめると、含意が多く、複雑に絡み合った話し手と聞き手との関係を表す機能を果たしている日本語 ST の交感的言語使用の翻訳には、KT、ET ともにその根底にある含意を探り、交感的機能をより明確に伝えるための加筆や同化などの方法が用いられていた。すなわち、交感的言語使用の翻訳にはそれぞれの TT の社会文化に合わせた自国化翻訳の傾向が強く、特に ET ではそのような自国化戦略がより明らかに見られる。以下、表 5 に交感的言語使用・文体についての翻訳方略をまとめておく。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	0	0	0	45	30	82	14	5	0	176
ET	0	0	0	32	34	77	19	11	0	173

表 5 交感的言語使用・文体の分析結果

4.4. 非言語コミュニケーション

非言語コミュニケーションについての定義や捉え方は学者によって様々であるが、本研究では Adler and Rodman(2006)の規定する広義の定義に基づいて分析を行う。Adler and Rodman(2006)は非言語コミュニケーションを「oral and nonoral messages expressed by other than linguistic means」(Adler and Rodman(2006: 154)と定義し、非言語コミュニケーションの種類を「姿勢と身振り(posture and gesture)、表情と視線(face and eyes)、声(voice)、身体接触(touch)、身体的魅力(physical attractiveness)、服装(clothing)、距離(distance)、時間(time)、領域(territoriality)、環境(environment)」に分類している。

このような非言語コミュニケーションは、人々のコミュニケーションの7割以上を占めており、また文化によっても差異がある(Adler and Rodman 2006)ため、テキスト内で言語化されている非言語コミュニケーションの翻訳においても、異文化コミュニケーションを成功させるための様々な方法が求められる。

分析の結果を見ると、非言語コミュニケーションの翻訳にはKTとET、それぞれ異国化翻訳と自国化翻訳という異なった方法が取られており、ST文化圏とTT文化圏との距離が翻訳戦略及びその方法の選択に何らかの影響を与えていることがうかがえる。

なお、非言語コミュニケーションのうち、慣習的意味が込められている非言語コミュニケーションについては次節で説明することにし、本節では身振りや表情などが直接描写されている例のみを紹介する。以下、具体例を挙げて分析を進める。

非言語コミュニケーションの翻訳には、KTの場合、ほぼ逐語訳に近い方法が取られているという特徴があり、これに対してETでは、主にパラフレーズや同化のような方法が取られている。まず、KT、ETともに逐語訳が用いられている例から見ていくと、例えば例(28)の「自分が興味を持っていることを話すときの人の表情」のようにどの文化圏でも普遍的と思われる非言語コミュニケーションの翻訳は、KTもETも「nwun-ul panccak pichnayss-ta(目をきらっと輝かせた)」、「eyes had shone」とほぼ逐語訳で訳していることが分かる。

(28) [ST] 思わずきいてしまった。陽一は、ぱっと目を輝かせた。(宮部、73)

[KT] Cetomolukey mwule-poko malass-ta. Yoichi-nun
 思わず 聞いて-みて しまっ-た 陽--は
nwun-ul panccak pichnayss-ta. (70)
 目-を きらっと 輝かせ-た

[ET] “What’s that?” he had asked. Yoichi’s **eyes had shone.** (49)

また、例(29)では ST の「頭をかく」に両 TT ともに逐語訳を使っているが、KT の場合 ST とほぼ同じく「失敗を自ら恥じたり照れたりするさま(広辞苑)」の意味で「**meli-lul kulkcekin-ta(頭をかく)**」が使われているのに対し、ET ではそのしぐさに若干ずれがあるにもかかわらず¹²、一旦「**scratched his head**」とそのまま訳してから「**and motioned at Maki**」と ST にはない動作を付け加えている。

(29) [ST] 男友達が頭をかく。「僕、家まで送ろうと思っていたんだけどね」(宮部、20)

[KT] Namca-chinkwu-ka **meli-lul kulkcekin-ta.**
 男-友達-が 頭-を かく
 “Nay-ka cip-kkaci teulyeta cwulye-ko hayss-nuntey.” (19)
 僕-が 家-まで 連れて やろう-と したん-だけど

[ET] The guy **scratched his head and motioned at Maki.**
 “I was going to walk her home...” (16)

そして、KT でも例(30)のように ST の「頬が強張る」という表現を韓国語としては不自然である「**ppyam-i kwute-cyess-ta(頬がこわばった)**」とそのまま逐語訳しているが、

¹² 各種辞典には **scratch one’s head** について次のように記載されている。

- (i) 「困って[驚いて]頭をかく；困りぬく、途方に暮れる。【日英比較】この表現は、日本におけるような照れたりはにかんだりするしぐさではなく、困惑・不満・不可解・自己嫌悪などを表わす。」(『研究社英和大辞典』第六版)
- (ii) 「(困って)頭をかく；困惑する。」(小学館ランダムハウス英和大辞典第二版)
- (iii) “to think hard about something” (*Cambridge Advanced Learner’s Dictionary*, 2nd ed.)
- (iv) “to think hard in order to find an answer to something” (*Oxford Advanced Learner’s Dictionary*, 6th ed.)
- (v) “a gerture indicating perplexity or hesitation <thoughtfully scratching his jaw> <scratched his head in bewilderment>” (*Webster’s Third New International Dictionary, Unabridged*)

おそらく ST の表現としても見慣れない表現を文学的表現としてそのまま生かしていると思われる。一方、ET ではそのような効果を出さずに、「he involuntarily stiffened at the sight」とパラフレーズで訳している。

(30) [ST] 覚悟はしていたし、慣れっこになっているつもりでも、一瞬頬が強張った。
(宮部、37)

[KT] Kako-nun hako issess-ko, ikswukhay-cyessta-ko sayngkak-hako issess-ciman
覚悟-は して いた-し 慣れて-きた-と 思っ-て いた-が
hanswunkan ppyam-i kwute-cyess-ta. (36)
一瞬 頬-が こわばっ-た

[ET] Mamoru had known this was coming and had tried to prepare himself for it, but he involuntarily stiffened at the sight. (27)

次に、非言語コミュニケーションの翻訳方法として多く見られる、しぐさなどを描写する表現をそのまま訳すよりはその意味を優先して伝えるというパラフレーズの例を見ていく。主に逐語訳が取られている KT でも逐語訳が不可能な場合はパラフレーズが用いられているが、例えば例(31)の「口をへの字に曲げた」という表現を訳すとき、韓国語にある「口を一の字につぐむ」という表現を使って同化の方法で訳すことも考えられるが、ここでは「camsi ip-ul kkwuk tamwul-ko issess-ta(しばらく口を堅くつぐんでいた)」とパラフレーズで訳している。また、ET でも KT と同様「frowned」というパラフレーズの方法が用いられている。

(31) [ST] より子は口をへの字に曲げた。「やっちゃったらしい」(宮部、13)

[KT] Yolikho-nun camsi ip-ul kkwuk tamwul-ko issess-ta.
より子-は しばらく 口-を 堅く つぐん-で い-た
“Il-ul nayn moyangiya.” (13)
事故-を 起こした らしい

[ET] Yoriko frowned. “Well, it happened.” (12)

だが、例(31)のような場合を除いては、例(32)と例(33)で見られるように **KT** では逐語訳で訳しても自然に思われる表現が **ET** ではパラフレーズで訳されていることが多く見られる。まず、例(32)の **KT** では **ST** の「表情がふっと曇った」を **KT** でも自然に使われている「**phyoceng-i mwuntuk hulye-cyess-ta(表情がふと曇った)**」と逐語訳しているが、**ET** では「**his face took on a look of concern**」とパラフレーズを用いてその意味をより明確に伝えている。

(32) [ST] 守を見ると、表情がふっと曇った。(宮部、66)

[KT] Mamolwu-lul po-teni **phyoceng-i mwuntuk hulye-cyess-ta.** (63)

守-を 見る-と 表情-が ふと 曇っ-た

[ET] (...)but **his face took on a look of concern** as soon as he saw Mamoru.

(45)

また、例(33)でも、激怒している局長の様子が **ST** で「目を吊り上げる」と描写されているが、**KT** では「**nwuncholi-ka wi-lo chikhye ollakass-ta(目じりが上にひき上がった)**」と **ST** とほぼ同じ表現を使っているのに対し、**ET** では表情をそのまま伝えるよりは「**looked furious**」と具体的なパラフレーズで訳しており、異文化への操作が行われていることが分かる。

(33) [ST] 「ふざけるな」局長が目を吊り上げた。(奥田、103)

[KT] “Mwe?” kwukcang-uy **nwuncholi-ka wi-lo chikhye ollakass-ta.** (105)

何 局長-の 目じり-が 上-に 引き 上がっ-た

[ET] “This is no goddam joke.” The chief **looked furious.** (85)

このような異文化への操作は、次の例で用いられている同化の方法でその戦略がより明らかになっている。例えば例(34)の場合、木下という人物が「そんな……」と相手に対してはっきり不満や反論が言えず、「口をとがらせる」場面が出ているが、**KT** ではそのような場面では **ST** と同じく「“……”」と何も言わないまま、その気持ちを「**ip-ul**

picwuk naymiless-ta(口をつんと尖らせた)」と訳している。これに対して ET では、まず「You've got to be kidding!」とはっきり不満を言ってから、「said Kinoshita petulantly」と訳しており、異文化への操作が加えられていることが見て取れる。

(34) [ST] 「あのな、十年前にはそんなものなかったんだ。ゲラは郵送にしてくれ」「そんな……」木下が口をとがらせる。(奥田、258)

[KT] “Ei, 10nyen cen-man hayto kulen ken epsesstakwu. Kyocengci-nun
おい 10年 前-だけ しても そんな もの なかった ゲラ-は
wuphyen-ulo ponay cwe.”
郵便-で 送って くれ
“……” Kinoshita-nun **ip-ul picwuk naymiless-ta.** (285)
木下-は 口-を つんと とがらせ-た

[ET] “Don't worry, you can send them by snail mail.”
“You've got to be kidding!” **said Kinoshita petulantly.** (207)

また、例(35)でも、和子という人物の話しを聞いた近所の主婦が、ことばを使わず「とがめるような顔で見る」ことで和子を非難しているが、KT ではそのような場面では「namwulanun tushan elkwul-lo Kacukho-lul palapoass-ta」と逐語訳をしても自然である。しかし、ET では同じ状況でも非難の意味ではない「gave Kazuko a questioning look」と同化を用いて訳されていることから、ST 文化圏との距離が KT と ET の翻訳方法の選択に影響を与えていることがうかがえる。

(35) [ST] そっけない口調に、主婦はとがめるような顔で和子を見やった。(宮部、78)

[KT] Mwuttwukttwukhan malthwu-ey, cwupwu-nun **namwulanun tushan**
そっけない 言葉遣い-に 主婦-は とがめる ような
elkwul-lo Kacukho-lul palapoass-ta. (74)
顔-で 和子-を 眺め-た

[ET] The woman **gave Kazuko a questioning look,** (...) (52)

加えて、例(36)を見ると、がっかりして「肩を落とした」義雄という人物の様子をKTではほぼ同じ動作である「*ekkay-lul nulettulyessta*」と訳している一方、ETではその落胆した様子を表現するために「肩を落とす」行為より大きい「*slumped on his chair*」という動作に置き換えて訳しており、ここにも文化の違いが浮き彫りになっている。

(36) [ST] 義雄は肩を落とした。この機会に買い換えるか。(奥田、256)

[KT] *Yosio-nun ekkay-lul nulettulyessta. I kihoy-ey pakkwul-kka.* (283)
 義雄-は 肩-を 垂れた この 機会-に 変えよう-か

[ET] *Yoshio slumped on his chair.*
 Maybe he should take this opportunity to get a new one. (206)

なお、ETでは異文化への調整のためにパラフレーズや同化のような方法以外にも省略も多く取り入れられている。例えば例(37)ではETで部分的な省略が見られるが、家主の女房の気に食わないまたは非難のような意味で描写されているSTの「顔をしかめ、鼻をふんと鳴らす」という動作が、KTでは「*elkwul-ul cciphwuli-ko, kho-wusum-ul han pen chi-konun*(顔をしかめて鼻笑いを一度して)」とほぼ逐語訳で訳されている一方、ETでは「*muttered the landlord's wife, screwing up her face*」だけになっており、「鼻を鳴らす」行為は省略されている。

(37) [ST] 「もったいないことをするねえ」家主の女房は顔をしかめ、鼻をふんと鳴らすと、掃除に戻った。(宮部、27)

[KT] “*Akkawun cis-ul haney.*” *cip-cwuin-uy anay-nun elkwul-ul cciphwuli-ko,*
 もったいない こと-を する 家-主-の 女房-は 顔-を しかめ-て
kho-wusum-ul han pen chi-konun tasi chengso-lul sicak-hayss-ta. (27)
 鼻-笑い-を 一 度 し-ては 再び 掃除-を はじめ-た

[ET] “*What a waste,*” *muttered the landlord's wife, screwing up her face and getting back to her chores.* (20)

さらに、例(38)では、書店で万引きをして捕まえた女子高生たちの様子を KT では ST の「唇には薄笑いさえ浮かんでいる」を「*ipswul-eynun yelpun wusum-mace ttiko issta*」と忠実に訳しているのに対し、ET では前の文章と合わせて「*Neither of the culprits looked too concerned*」とパラフレーズで訳しつつ、具体的な表情の描写は省略しているなど、様々な操作が加えられている。

(38) [ST] 二人とも、それほどこたえているようにも、怯えているようにも見えない。
唇には薄笑いさえ浮かんでいる。(宮部、131)

[KT] Twul ta kulehkey thakyek-ul patun keskathcito, kepmekun keskathcito
二人とも そんなに 打撃-を 受けた ようにも 怯えている ようにも
anh-ta. **Ipswul-eynun yelpun wusum-mace ttiko issta.** (124)
ない 唇-には かすかな 笑い-さえ 浮かべて いた

[ET] **Neither of the culprits looked too concerned.** (84)

このように、非言語コミュニケーションの翻訳には KT よりは ET の方でより自国化の操作が行われているが、例えば例(39)のように、KT でも場合によっては同化などの方法が用いられていることも指摘しておきたい。例(39)は携帯電話が使えないことをメル友に伝えて欲しいという主人公の依頼に、友達の洋介が反対・疑問などの意味で「眉をひそめる」場面であるが、ET ではそれが「*frowned*」とパラフレーズで訳されている。KT でも、その場面で TT にとってより自然と思われる「*ekkay-lul ussukhayss-ta*(肩をそびやかした)」と訳されており、同化の手法が取られていることが分かる。

(39) [ST] 洋介が眉をひそめた。「そこまでしなくてもいいんじゃないのか。送れなきゃ、向こうだってあきらめるだろう」(奥田、198)

[KT] Yosukhey-ka **ekkay-lul ussukhayss-ta.** “Kulegkey-kkaci hal philyo-nun
洋介-が 肩-を そびやかした そこ-まで する 必要-は
epscanha. Censong-i an-toy-myen kunyang phoki-hal-theyntey mwel.” (218)
ない 伝送-が できないなら そのまま 放棄-する-だろう よ

[ET] Hiroshi **frowned**. “Who cares? I mean, if their texts don’t get through, they’ll just stop trying to send them.” (160)

以上から、非言語コミュニケーションの翻訳においては、KT ではほぼ逐語訳に近い異国化翻訳が、そして ET では主にパラフレーズや同化のような自国化翻訳の方法が用いられており、ST 文化圏と TT 文化圏との距離によって翻訳戦略にも差が出ていることがうかがえる。ただし、KT の場合、方法としては逐語訳という異国化戦略が取られているとはいえ、KT 内でそれが ST の異化的効果を持っているとは言い難く、このことについては今後更なる考察が必要になるとと思われる。

最後に、各翻訳方略が用いられた回数を一覧表にしてまとめておく。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	0	0	0	128	10	15	2	6	0	161
ET	0	0	0	77	26	29	20	15	0	167

表 6 非言語コミュニケーションの分析結果

4.5. 社会文化的慣習

Nord(1997: 112)が、「各文化にはその文化固有の習慣、規範、慣習が存在し、「翻訳の文化的問題」は ST の文化と TT 文化の言語的行動と非言語的行動の指針の役割をする規範と慣習の差異から来る結果である」と指摘しているように、異なる文化的背景を持つ ST の慣習的意味が込められている非言語コミュニケーションをはじめ、ST 文化の構成員なら誰もが背景知識として共有している社会文化的慣習を翻訳することは容易ではない。

そのため、各 TT にも異文化コミュニケーションを成功させるための様々な方法が取られていたが、なかでも KT ではそのような異文化の差を訳注などの解説を用いて、そして ET ではパラフレーズや加筆を通じて訳している。また、ET では自国化方法が用いられている箇所が KT では多くの場合逐語訳のような異国化方法が取られていることから、ここでも ST 文化圏との距離が TT の翻訳方法に影響しているのではないかと推測される。以下、具体例を挙げて各々の翻訳方法を見ていく。

まず、ある行為が ST の社会文化的慣習であることが前提知識として明らかに認識で

きる例(40)と例(41)のような箇所では、KT と ET ともに異国的要素をそのまま逐語訳に近い方法で訳している傾向が見られる。例(40)を見ると、人身事故を起こして拘束されていた大造という人物が釈放されてから家族に謝るときの様子が ST で「畳に手をつき頭を下げた」と表現されているが、KT では「畳」は省略されているものの、「pang-patak-ey son-ul ciphko meli-lul swukyess-ta(部屋の床に手をつき、頭を下げた)」とほぼ逐語訳で訳しており、ET でも「bowed down low on the tatami mats」とその様子が十分うかがえるように訳している。

韓国では同じような状況で父が家族に ST のようなしぐさで謝罪する習慣は存在せず、また違う状況だとしても「両膝をついて謝る」ことがこの場合と同じレベルの謝罪に当たる。そして、ET の文化においてもそのような行為は ST の異国的要素であることが明らかであるため、両 TT ともに ST 文化の要素をそのまま取り入れているといっただけよいと思われる。

(40) [ST] かくばった^{からだ}身体を丸めるようにして、大造は畳に手をつき頭を下げた。
(宮部、202)

[KT] Neymonan mom-ul wumchuli-tusi hamye, Taico-nun
かくばった 体-を 縮めるように して 大造-は
pang-patak-ey son-ul ciphko meli-lul swukyess-ta. (192)
部屋-床-に 手-をつき 頭-を 下げた

[ET] Having said this, Taizo **bowed down low on the tatami mats.** (127)

また、例(41)を見ても、接待のための温泉旅行でクライアントの「背中を流す」行為が KT、ET ともにほぼ逐語訳を用いて訳されている。接待のためにクライアントの背中を流す行為が ET の文化圏で自然なことだとは思われず、KT の文化でも背中を流す習慣や暗黙の上下関係の意味は似ているものの、この場面では ST 文化の異化的効果を与える要素として受け入れられると思われる。

(41) [ST] 「旅館ではちゃんとやれよ。風呂で背中ぐらい流すんだぞ」(奥田、103)

[KT] “Yekwan-eysenun ceytaylo hay.

旅館-では ちゃんと やれ

Thang-ey tulekase-nun tung-ilato mile cwuko.” (105)

湯-に 入っ-たら 背中-でも 流して あげて

[ET] “I’m expecting you to take proper care of them back at the inn, okay?

The least you can do is scrub their backs in the bath.” (85)

次に、社会文化的慣習の翻訳において KT と ET の方法の差がはっきりと出ている例を見ていく。例(42)から例(45)では、KT が ST をほぼ逐語訳で訳しているのに対し、ET は加筆を用いて異文化への理解を図っており、ここでも ST 文化圏との距離が TT の翻訳方法に影響していることが見て取れる。

まず、例(42)は飛び降り自殺が起きた場所にマンションの管理人が浄化の意味で「塩をまいて」いる場面であるが、KT では塩をまく行為が KT の社会でも ST と同じ意味で使われているため、「sokum-ul ppwulin(塩をまいた)」と逐語訳だけで訳しているのに対し、ET では「sprinkled the area with salt to purify it against similar misfortune」と逐語訳に加えそこに秘められている意味を加筆して訳している。

(42) [ST] マンションの管理人がホースで水をまいて血を洗い流し、そこに塩をまいたことも知らない。(宮部、9)

[KT] Maynsyen kwanliin-i hosu-lo mwul-ul ppwulye phi-lul ssise nay-ko,

マンション 管理人-が ホース-で 水-を まいて 血-を 洗い 出し-て

keki-ey **sokum-ul ppwulin** kes-to molun-ta. (9)

そこ-に 塩-を まいた こと-も 知らない

[ET] The building caretaker came out and hosed the blood off the street,

then **sprinkled the area with salt to purify it against similar**

misfortune. (8)

また、例(43)では葬式での一連の流れが描写されているが、KT では ST の儀式が KT

の慣習と完全に同じとは言えないものの、そこからある程度推測することができるため、「pwunhyang-ul machiko, ceytan-eyse ttena tokkyeng-ul tulesst-ta(焼香を済ませ、祭壇から離れて読経を聞いた)」とそのまま逐語訳で訳している。それに対して ET では、ST から読み取れない情報までも加え非常に詳しく加筆しており、見慣れない ST の異国的要素への理解を高めようとする取り組みがうかがえる。

(43) [ST] 和子はあわただしく焼香を済ませ、祭壇から離れて読経^{どきょう}を聞いた。
(宮部、76)

[KT] Khacukho-nun hetwungcitwung pwunhyang-ul machiko,
和子-は あわただしく 焼香-を 済ませ
ceytan-eyse ttena tokkyeng-ul tulesst-ta. (73)
祭壇-から 離れて 読経-を 聞いた

[ET] **The casket and an altar had been set up in a tatami room at the front of the house, and a Buddhist priest sat in front of it, chanting. The floor-to-ceiling windows of the room had been opened so the mourners could offer incense and prayers without having to come into the house. Kazuko waited in line for her turn, and then stepped to the side to listen to the priest. (51)**

さらに例(44)と(45)でも、ET では ST には出ていない ST 社会の暗黙的知識が付け加えられている。例(44)を見ると、ST の「肩書き抜きという方針もとっている」を KT では説明がなくても ST と同じくそれが普通ではないことが分かるため、「cikchayk-ul ppayko pwulunta-nun pangchim-to chwihako issta(肩書きを抜いて呼ぶという方針をとっていた)」とほぼ逐語訳しているが、ET では「contrary to the norm in Japan, employees did not use ranks or honorific language」のようにそのことが ST 社会では一般的ではないという情報を加筆している。

(44) [ST] もう一つ、「ローレル」では、社員同士で呼び合う場合、肩書き抜きという方針もとっている。(宮部、66)

[KT] Tto-han-kaci, ‘Loleyl’ eysenun sawen-tul-kkili selolul pwulul kyengwu,
もう一つ ローレル では 社員-ら-同士 互いを 呼ぶ 場合
cikchayk-ul ppayko pwulunta-nun pangchim-to chwihako issta. (63)
肩書き-を 抜いて 呼ぶ-という 方針-も とって いた

[ET] Another interesting thing about Laurel was that, **contrary to the norm in Japan, employees did not use ranks or honorific language** when addressing each other. (44)

また、例(45)でも同じく、STの「男子運動部でも女子マネージャーをおいていない」をKTでは説明なしに逐語訳で訳しているのに対し、ETでは「Most boys’ sports teams in Japanese schools have girls with the title of “manager,” but who are more like volunteer maids」と日本の学校の男子運動部には普通女子マネージャーがいることやそのマネージャーの役割までも詳しく加筆してから、次の文章に操作を加えその学校にマネージャーがないことを伝えている。

(45) [ST] この高校では、男子運動部でも女子マネージャーをおいていない。
(宮部、183)

[KT] I hakkyo-eysenun **namca wuntong-pu-ey yeca maynice-lul twuci**
この 学校-では 男子 運動-部-に 女子 マネージャー-を おいて
anhnunta. (174)
いない

[ET] **Most boys’ sports teams in Japanese schools have girls with the title of “manager,” but who are more like volunteer maids.(...)Iwamoto, had decreed that this school would discontinue such a tradition.** (115)

加えて、例(46)を見ると、自分の病名を知った人の気分を描写するとき、STでは「何かを宣告された気分だった」としか表現されていないが、KTとETではどちらも同じく加筆の方法を取っているものの、それぞれ異なった表現が選ばれている。つまり、「宣告」をKTでは「mwusun am senko-lato patun tushan kipwun-iess-ta(何か癌宣告でも受け

たような気分だった)」と訳しているのに対し、ETでは「He felt like a criminal being sentenced by a judge」のように異なる表現が使われている。このように、STの同じ箇所でも同じ手法が取られていても、TTによってそこから生み出されるイメージが異なるというのは興味深い点である。

(46) [ST] おかしいとは思っていたが、こうした病名がつけられると、余計に心細くなった。何かを宣告された気分だった。(奥田、235-6)

[KT] Casin-i way ilenunci isanghata-nun sayngkak-ul hay otaka ilehkey
自分-が なぜ こうなのか おかしい-という 思い-を して きて このように
pyengmyeng-ul hwakin-hako nani maum-un te chocohaycyess-ta.
病名-を 確認-して から 心-は より 焦燥-にかられ-た
Mwusun am senko-lato patun tushan kipwun-iess-ta. (259)
なにか 癌 宣告-でも 受けた ような 気分-だった

[ET] There was no logical reason for it, but learning the official name for his condition increased his sense of hopelessness. **He felt like a criminal being sentenced by a judge.** (188)

続いて、例(47)と例(48)ではKTの特徴的な翻訳方法とも言える解説の例が見られる。これはおそらくETとKTの翻訳においてのある種の社会的規範¹³であると思われるが、訳注などを通じた解説の方法が全く見られないETに比べ、KTではSTの異質的な社会文化的慣習について訳注をつけて説明する方法が取られている。

まず、例(47)はKTでページの下段に訳注をつけて解説を行っている例であるが、STの「三の酉^{とり}まである年だから、火事が多い」というところを「olhay-nun yuil 酉日-i sey pen issnun hay-lase hwacay-ka manha*」とまず「酉日」という漢字をつけて逐語訳した後、訳注を付けて詳しく説明している。一方、ETでは「There are three Days of the Cock this year, so there are bound to be lots of fires」と加筆などの方法も取らずに、

¹³ 翻訳規範(Translation norms): ある共同体が共有する翻訳に対して持つ一般的価値または観念(何が正しくて何が正しくないのか、何が適切で何が不適切なのか)であり、個別状況に適切に適用できる翻訳の遂行指針である(Toury 1995: 55)。

ほぼ逐語訳だけで訳している。

(47) [ST] 「今年は三の酉^{とり}までである年だからね、火事が多いよ」より子がそう言って、
守の部屋にも「火の用心」のステッカーを貼^はっていた。(宮部、267)

[KT] “Olhay-nun yuil 酉日-i sey pen issnun hay-lase hwacay-ka manha*¹⁴.”

今年-は 酉日-が 三 回 ある 年だから 火災-が 多い

Yolikhka-ka kulehkey malhamye Mamolwu-uy pang-eyto ‘pwul-cosim’

より子-が そう 言いながら 守-の 部屋-にも 火-用心

suthikhe-lul pwuthiko kassta. (254)

ステッカー-を 貼って 行った

[ET] “There are three Days of the Cock this year, so there are bound to be lots of fires,” said Yoriko. She put up stickers throughout the house admonishing everyone to “Watch Out For Fire.” including one in Mamoru’s room. (166)

そして、例(48)では KT で「赤い羽根」という語彙に訳注をつけて解説しているが、ST の「胸に赤い羽根をつけて歩く」を逐語訳しただけではその行動の意味が伝わらないため、訳注でその意味を解説するという方法が用いられている。これに対し、ET では ST の習慣は訳さずに「they even contributed to the end-of-the-year charities!」とその意味だけを生かすパラフレーズの方法が取られている。

(48) [ST] 毎年十月が来れば真っ先に胸に赤い羽根をつけて歩く。(宮部、154)

[KT] Maynyen siwel-i omyen ceyil mence kasum-ey ppalkan kisthel

毎年 十月-が 来ると 一番 先に 胸-に 赤い 羽根

¹⁴ *Yuil-un 12il mata tolaonta. 11wel lil pwuthe 6il saiey yuil-i issnun hay-eynun 11wel-ey yuil-i sey pen tolaokay toynuntye, ilpon-eysenun 11wel-ey yuil-i sey pen issnun hay-ey hwacay-ka manhtanun thongsal-i isssta.

(酉日-は12日ごとに回ってくる。11月1日から6日の間に酉日-がある年-には11月に酉日-が3回回ってくるが、日本-では11月-に酉日-が3回ある年-に火災-が多いという通説-がある)

ilpon-uy ‘ppalkan kisthel kongtong-mokum’ ilanun moim-un maynyen
 日本-の 赤い 羽 共同-募金 という 会-は 毎年
 10wel pwuthe sek tal-kan cenkwukcek-ulo mokum untong-ul
 10月 から 3 ヶ月間 全国的-に 募金 運動-を
 phyelchinun-tey, mokumham-ey ton-ul nehun salam-eykey-nun
 繰り広げる-が 募金箱-に お金-を 入れた 人-に-は
 ppalkan kisthel-ul tala cwunta ul talko tanici. (146)
 赤い 羽-を つけて くれる を つけて 歩く

[ET] You know, they even contributed to the end-of-the-year charities! (98)

なお、ET では例(49)のように ST の社会的通念が省略されている場合もしばしば見られる。例(49)では「一人暮らしの女性は用心のためその事実を隠す」というような ST の社会的通念が、同じ通念が存在している KT ではそのまま逐語訳されているが、そのような社会的通念が ST と異なると思われる ET では、不必要な推測を防ぐためかその内容が省略されている。

(49) [ST] 四〇四号室の表札には、ただ部屋番号が書いてあるだけだった。管理人もいないところだから、極力、女性の一人住いとわからないようにしてあったのだろう。(宮部、102)

[KT] 404hosil-uy mwunphay-eynun ocik hoswu-ka ssuye issul ppwun-ita.
 404 号室-の 表札-には ただ 号数-が 書いて ある だけだつた
 Kwanliin-to epsnun kos-ini, toytolok yeca honca santanun
 管理人-も いない ところ-だから なるべく 女子 一人 住むとの
 sasil-ul al-swu-epstolok hayssul kes-ita. (97)
 事実-を 分から-ないように した だろう

[ET] There was no name on the door. (67)

以上の分析結果から社会文化的慣習の翻訳方法をまとめてみると、まず KT では主

に逐語訳のような異国化翻訳方法が取られており、STの異質的な慣習には訳注などの解説を通じて、異化的要素を積極的に取り入れる傾向が見られる。他方、ETでは解説は使わずSTの異化的要素を加筆やパラフレーズなどの自国化翻訳方法を用いて訳す傾向が強い。このような翻訳戦略の違いはKTとETの翻訳規範の差からも出ていると思われるが、ST文化圏とTT文化圏との距離もその選択に影響を及ぼしていると考えられる。以下、表7にその分析結果をまとめておく。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	0	0	0	42	1	1	1	1	3	49
ET	0	0	0	18	10	3	6	12	0	49

表7 社会文化的慣習の分析結果

4.6. 慣用表現

慣用表現(idiom)とは、二つ以上の語から構成され、個々の語の意味からは全体の意味が読み取れない語句・表現のことであり、長い時間をかけて特定の文化共同体の中で形成され、言語として表出されている慣用句や諺、成語、熟語などがこれに当たる。

Baker(1992)は、慣用表現の翻訳にはまずSTの慣用表現を認識してその意味を正確に解釈する必要があるとし、翻訳時の問題点を次のように指摘している。まず、慣用表現は文化的特殊性を持っているため、SLの慣用表現に当たる等価語がTLには存在しない場合があり、類似した対応語があるとしてもその使い方が異なることもある。また、慣用表現がST内で逐語的意味と慣用的意味が同時に込められて使われている場合、TTでそれを使った言葉遊びなどが再現できない。最後に、SLとTLでは文語の談話で慣用表現を使う慣習やそれが使われる文脈と頻度までも異なる場合がある。

Bakerも指摘しているように、慣用表現の翻訳には異文化であることから生じる様々な障害要因が存在しているため、ST文化との効果的なコミュニケーションのためには各TTそれぞれの異なる方法が求められる。

慣用表現の翻訳の特徴としては、まずST文化とTT文化に共通して存在する表現はそのまま逐語訳される傾向が強く、ST文化固有の表現などはKT、TTともに各々の文化に合わせたパラフレーズや同化、省略のような自国化戦略がとられる傾向が見られる。以下、慣用表現を慣用句と諺、そして漢字成語に分けて具体的な事例を見ていく。

4.6.1. 慣用句

慣用句の翻訳には、ST と TT の文化で共通に使われている場合を除いては、ほとんどパラフレーズや同化のような方法が用いられている。まず慣用句が ST と TT の文化でほぼ同じように使われている場合を見ると、例(50)では「藁にもすがる」という表現が KT、ET とともに逐語訳に近い方法で訳されている。

この表現は「おぼれる者は藁をもつかむ」という諺から来たと思われるが、KT と ET の文化にも、それぞれ「mwul-ey ppaci-myen ciphwulaki-lato wumkhyecwin-ta(水におぼれると藁でもわしづかみにする)」と「A drowning man will catch at a straw.」という同じ諺が存在しているため、そのまま対応する慣用句を取り入れていると見られる。

(50) [ST] 今は藁にもすがりたい心境なのだ。(奥田、78)

[KT] Cikum-un **ciphwulaki-lato capko siphon** simceng-ita. (76)

今-は 藁-でも つかみ たい 心情-だ

[ET] The way things were now, he was quite happy to **clutch at any straw that presented itself.** (63)

次に、例(51)を見ると、同じ ST の慣用句であっても同一 TT 内でそれぞれ異なる方法が取られていることが分かる。まず例(51a)では、ST の「腫れ物に触れるよう」という表現が KT では「kkayciki swiwun kulus talwutus cosimsulewe-hayssci(壊れやすい器を扱うように用心深くした)」と同化の方法で、そして ET では「walked around on tiptoe, afraid of hurting me」と同化に加筆が加えられた方法で訳されている。

一方、例(51b)では、同じ慣用句を KT では「<congi>lato talwutus(「腫れ物」でも扱うよう)」と逐語訳しており、ET では「like I was made of brittle glass」と表現は異なるが例(51a)と同じ同化の方法を取っている。KT の文化で ST の「腫れ物に触れるよう」に当たる慣用句は例(51a)の「壊れやすい器を扱うよう」がほぼ相当するが、「腫れ物を扱う」という表現からもその意味が十分読み取れるため、例(51b)では逐語訳で済ましていると思われる。このような日本語 ST からの慣用句の逐語訳は KT でしばしば見られる現象である。なお、ET ではいずれも同化の方法が取られているものの、持ち込まれたイメージにはそれぞれバリエーションが見られる。

(51a)[ST] 両親も私のことを腫れものでもさわるみたいに扱ってたわ。(村上、217)

[KT] Pwumo-nim-un na-lul mwusun **kkayciki swiwun kulus talwutus**
両親-[敬称]-は 私-を まるで 壊れ やすい 器 扱うよう
cosimsulewe-hayssci. (191)
用心深く-した

[ET] My parents **walked around on tiptoe, afraid of hurting me.** (155)

(51b)[ST] あまり、そう思いたくなかったが彼は私に対して“ハレモノに触れるよう”
だった。(吉本、189)

[KT] Pyello kulehkey sayngkakhako siphci-nun anhassci-man ku-nun machi
別に そう 思い たくは なかった-が 彼-は まるで
<congki> lato talwutus na-lul tayhayss-ta. (183)
腫れ物 でも 扱うように 私-を 対応し-た

[ET] He was treating me **like I was made of brittle glass.** (142)

さらに、例(52)では ST で「敷居が高い」と「高嶺の花」という表現が使われているが、「敷居が高い」は両 TT とともにパラフレーズで訳しているのに対し、「高嶺の花」の翻訳には KT と ET で異なる方法が取られている。まず KT では ST の「高嶺の花」の対応語である「kulim-uy ttek(絵の餅)」という表現を使わず、逐語訳に近い「ce sankkoktayki-uy kkoch(あの高嶺の花)」と訳している。一方、ET では「高嶺の花」が「an unattainable object」と逐語訳や同化の代わりにパラフレーズで訳されている。

(52) [ST] 「だからもっと敷居を高くして、高嶺の花になって、(...)」(奥田、145)

[KT] Kulenikka swucwun-ul te nophye-se ce **sankkoktayki-uy kkoch-i**
だから レベル-を より 高め-て あの 高嶺-の 花-に
toynun ke-ya. (31)
なる の-だ

[ET] So you've got to move yourself up a notch, make yourself more of an **unattainable object**. (119)

加えて、例(53)を見ると、STの「顔が利く」という慣用句の理由として「日本医師会の理事」と「交詢社の幹部」が挙げられているが、「交詢社の幹部」という内容の省略は両TTで共通に見られるものの、「顔が利く」の翻訳にはここでもそれぞれ異なる方法が取られている。韓国語には「顔が利く」に対応する慣用句がないため、KTでは「anun salam-i manhke tun(知り合いが多い)」とパラフレーズを用いて訳しているが、ETでは「has all kinds of connections among his old college friends, so he can pull a lot of strings」とまず加筆してからそれに対応するETの慣用句で訳すという同化の方法を加えている。

(53) [ST] うちのおとうさん、日本医師会の理事で交詢社の幹部だから、あちこち顔が利くの。(奥田、169)

[KT] Uli apeci-ka ilpon-uysa-hyephoy isa-lase yekiceki **anun salam-i**
わが 父-が 日本-医師-協会 理事-で あちこち 知り 合い-が
manhketun. (59)
多いの

[ET] My dad is a governor of the Japan Medical Association and **has all kinds of connections among his old college friends, so he can pull a lot of strings,**" (140)

4.6.2. 諺

諺の翻訳にも慣用句とほぼ同じような方法が用いられている。まず、ST文化とTT文化に共通している諺の翻訳方法から見ていくと、例えば例(54)のようにSTの「^{わら}藁の山のなかで針を探す」という諺が、KT、ETともにそれぞれ「ciphwulaki sok-eyse panul-ul chacnunta(藁の中で針を探す)」と「looking for a needle in a haystack」とほぼ逐語訳されていることが分かる。ただし、ETでは「^{わら}藁の山のなかで針を探す」はそのまま訳しているものの、その次の「針の山のなかで特定の一本の針を探す」という諺を使っ

た言葉遊びのような部分は省略されており、ここでは KT との違いが見られる。

(54) [ST] よく『藁^{わら}の山のなかで針を探す』って言うけど、おまえの言っている程度の手掛りでその雑誌を探そうってのは、針の山のなかで特定の一本の針を探すようなもんだよ。(宮部、127)

[KT] ‘Ciphwulaki sok-eyse panul-ul chacnunta’ lanun mal-i issnuntey,
藁 中-で 針-を 探す という 言葉-が あるが
ney-ka malhanun cengto-uy tanse-lo ku capci-lul chacanaynun
おまえ-が 言っている 程度-の 手掛かり-で その 雑誌-を 探し出す
ken santemi-chelem ssahin panul sok-eyse thukceng-han panul
ことは 山-のように 積まれた 針 中-で 特定-の 針
hana-lul chacanaynun ke-lang katha. (121)
一本-を 探し出す の-と 同じだ

[ET] You’re **looking for a needle in a haystack!** (82)

次に、例(55)の KT では ST の諺がそれに対応する TT の諺で置き換えられるという同化の方法が使われているが、KT では ST の「上には上がある」をその対応語である「ttwinun nom wi-ey nanun nom-i issnun pep-ita(走る者の上に飛ぶ者がいるものだ)」という諺に置き換えて訳している。これに対し、ET では「Even the best man meets his match.」という対応表現ではなく、「But now they had」と文脈に合わせてパラフレーズで訳している。

(55) [ST] そして、これ以上ろくでもないことはないだろうと確信していたのに、上には上があるものだ。(吉本、79)

[KT] Kuliko te isang pyelil anin il-un epsul kes-ilako hwaksin-hayssnuntey,
そして これ 以上 変事 ない こと-は ない こと-と 確信-したのに
ttwinun nom wi-ey nanun nom-i issnun pep-ita. (76)
走る 者 上-に 飛ぶ 者-が いる もの-だ

[ET] (...), and things can't get any worse. **But now they had.** (55)

また、例(56)を見ても ET では ST の「案ずるより生むがやすし」という諺に対応する「Fear is often greater than the danger.」という諺を使わずに、「imagination is sometimes worse than reality」とパラフレーズを用いて訳しているなど、ET では諺の翻訳において同化よりはパラフレーズの方法を好む傾向が見られる。一方、KT では、「案ずるより生むがやすし」に対応する諺はないため、ここでは「silceylo pwuticchye pocito anhkose(実際にぶつかってみてもいないのに)」とパラフレーズで訳しているが、傾向としては例(55)のような同化の方法がより多く見られる。

(56) [ST] 「泣いて怒るのは想像上の私だったでしょ。案ずるより生むがやすし。」
(吉本、88)

[KT] “Wulmyense hwanaynun kes-un sangsang sok-uy na-yesskeyssci.
泣きながら 怒る の-は 想像 中-の 私-だったでしょ
Silceylo pwuticchye pocito anhkose.” (86)
実際 ぶつかって みても ないのに

[ET] “It was all your imagination.
And **imagination is sometimes worse than reality.**” (64)

続いて、例(57)の ET では、ST の「転がる石には苔^{こけ}がつかない」との表現とそれに関連した内容が全て省略されている。この諺も英語の「A rolling stone gathers no moss.」に由来するが、この諺には ST の本文にも出ているように「職をよく変える人は成功しない」というマイナスの意味と、特に米国で用いられている「活動する人は常に新鮮である」というプラスの意味が共存している。つまり、ET ではおそらくその諺の持つ二重の意味から来る混乱を防ぐために ST のその部分を省略して訳していると思われる。一方、KT では同例の諺の場合、プラスの意味で解釈するのが一般的ではあるが、同じくマイナスの意味も知られているため、ST をそのまま「kwulunun tol-eynun ikki-ka kkici anhnunta」と逐語訳していると思われる。

(57) [ST] 転がる石には苔^{こけ}がつかない。直美の父親は、その言葉の持つ悪い一面の信奉者だった。これだけ転がっていても、身についたものなどなにもあるまい。(宮部、353)

[KT] **Kwulunun tol-eynun ikki-ka kkici anhnunta.** Naomi-uy apeci-nun
転がる 石-には 苔-が つか ない 直美-の 父親-は
ku mal-i kaciko issnun nappun ilmyen-uy sinpongca-yessta.
その 言葉-の 持って いる 悪い 一面-の 信奉者-だった
ilehkey manhi kwullessumyen mom-ey ikhin ke-lakonun amwukes-to
こんなに 沢山 転んだら 身-に ついた もの-とは 何-も
epsul kes-ita. (337-8)
ない だろう

[ET] () (219)

なお、例(58)では Baker(1992)の言う慣用表現の翻訳時の問題点の一つである「ST内での慣用表現に逐語的意味と慣用的意味が同時に込められている場合」の例が見られる。この例では ST の「蛙の子は蛙」という諺をその慣用的・逐語的意味を変形して使用しているが、KT、ET とともに ST の「蛙の子がみんな蛙^{かえる}になってたら」をそのまま「kaykwuli-uy casik-i cenpwu kaykwuli-ka toynta-myen」、「If frogs only produced frogs」と逐語訳だけで訳しているため、ST の逐語的意味は生かされているものの、その慣用的意味は両 TT とともに伝えられていないと思われる。

ST の「蛙の子は蛙」に対応する諺は KT、TT とともに存在するため、もし他の場面だったら、同化やパラフレーズのような方法が用いられる可能性もありうるが、例(58)のような場合はそれが不可能であるため、両 TT とともに慣用的意味よりは逐語的意味を選択して逐語訳で訳していると考えられる。

(58) [ST] 「蛙^{かえる}の子がみんな蛙^{かえる}になってたら、周りじゅう蛙だらけでうるさくてかなわん。(…)蛙の子が犬になったり馬になったりするのを見るのが面白いからだ」(宮部、216)

[KT] “**Kaykwuli-uy casik-i cenpwu kaykwuli-ka toynta-myen**, cwuwi-nun
蛙-の 子-が みんな 蛙-に なっ-たら 周り-は
onthong kaykwuli-thwusengila sikkulewese kyentil swu epsul keya. (...)
全て 蛙-だらけで うるさくて 耐える こと できない だろう
Kaykwuli-uy casik-i kay-ka toykena mal-i toynun kel ponun key
蛙-の 子-が 犬-に なったり 馬-に なる のを 見る のが
caymiisski ttaymwuniya.” (206)
面白い からだ

[ET] “**If frogs only produced frogs**, we’d have nothing but frogs everywhere making a racket. I’m not too bright myself, but the reason I manage to stick with this job is that it’s so interesting to watch the polliwogs turn into dogs and horse and other types of animals.” (135)

4.6.3. 漢字成語

日本語 ST の場合、漢字成語も慣用表現の一つとして多く使われている。KT は ST と同じ漢字文化圏に属しており、漢字成語の意味や使い方も若干の違いはあるもののほぼ同様であるため、漢字成語の翻訳においても漢字の移植をはじめ様々な方法が取られている。これに対し、ET では漢字成語も他の慣用表現と同じく多くの場合、同化とパラフレーズの方法を用いて訳されている。

まず、漢字成語が KT で ST と同じく逐語訳され、漢字まで括弧内で移植されている場合の例を見ると、例(59)のように ST の「無私無欲」が KT で「mwusamwuyok(無私無慾)」と訳されている。KT ではこのように ST の漢字成語が KT と同じ意味と使い方で使われている場合はそのまま逐語訳して、場合によっては漢字も移植することが多い。反面、同例の ET では ST の漢字成語を「無私無欲の人間」まで含めて、「a Zen saint」と同化を用いて訳している。

(59) [ST] 「(...)いわば**無私無欲**の人間だよ。(...)」(村上、103)

[KT] “Ilultheymyen **mwusamwuyok(無私無慾)**, kulen inkan-iketun.[...]” (97)
いわば 無私無欲 そんな 人間-だよな

[ET] “(...)I could be a **Zen saint**.(...)” (71)

とはいえ、同じ意味を持つ漢字成語であっても、その文脈などの使い方によっては KT でも例(60)と例(61)のように同化やパラフレーズの方法が取られることがしばしば見られる。まず例(60)を見ると、ST の「得意満面」が KT では「uykiyangyang(意気揚々)」という別の漢字成語で訳されていることが分かる。「得意満面」という漢字成語は韓国語でも同じ意味で使われてはいるが、ここでの使用は不自然であるため、別の漢字成語で置き換えるという同化が行われていると思われる。一方、ET では「proud」というパラフレーズの手法が取られている。

(60) [ST] そんな彼女たちが得意満面でしゃべったことだったんだ。

いいか? 得意満面でだぞ。(宮部、154)

[KT] Kulen kunye-tul-i **uykiyangyang**-han elkwul-lo han yayki-yesse.

そんな 彼女-ら-が 意気揚々-な 顔-で した 話-だった

Alkeyssni? **Uykiyangyang**-hakey maliya. (146)

分かる 意気揚々-に だよ

[ET] They were **proud** of how they made their livings.

Do you hear me? **Proud!** (98)

また、例(61)でも ST の「支離滅裂」という漢字成語が KT で「hetwungtayko issess-ta (慌てふためいていた)」とパラフレーズで訳されている。「支離滅裂」は韓国でもよく使われている漢字成語であるが、例(61)のような使い方はしないため、ここでは漢字成語であってもパラフレーズで意味を訳すという方法が取られていると思われる。なお、ET では、「running around like a chicken with its head cut off」のように同化の方法を用いて漢字成語を訳している。

(61) [ST] 旅行用の小さな歯ブラシセットと、フェイスタオルを探し出すのに何分を要しただろう。私は支離滅裂だった。(吉本、68)

[KT] Yehayng-yong cokuman chissol seythu-wa swuken-ul chacnuntey
 旅行-用 小さい 歯ブラシ セット-と タオル-を 探すのに
 myech pwun-ina kellyess-ta. Na-nun **hetwungtayko issess-ta.** (65)
 何 分-も かかった 私-は 慌てふためいて いた

[ET] How long did it take me to put together an overnight bag?
 I was **running around like a chicken with its head cut off.** (47)

以上をまとめると、文化的特殊性が強く、その形や使い方などの慣習的差異が翻訳時の問題点として指摘されている慣用表現の翻訳には、STとTTの文化で共通して使用されている慣用表現は主に逐語訳などの方法が取られている一方、ST文化固有のものに対してはTTそれぞれの文化に合わせたパラフレーズや同化、省略などの自国化戦略の方法が用いられる傾向が強いと考えられる。特に、ETではKTで逐語訳になっているところもほぼパラフレーズが用いられており、省略もしばしば見られるなど、自国化方法がより好まれていることがうかがえる。

なお、KTの場合、同じ漢字成語であっても逐語訳だけでなく、KT文化での使い方に合わせて翻訳方法が取られていることは注目に値すると思われる。

以下、慣用表現の翻訳方略をまとめると、表8のようになる。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	0	0	0	62	167	59	5	8	0	301
ET	0	0	0	18	216	45	22	11	0	312

表8 慣用表現の分析結果

4.7. 固有名詞・地名

固有名詞と地名の翻訳において問題になるのは、それが単にある対象を指示するのではなく、そのなかに暗黙の意味や情報を含んでいる場合である。Fernandes(2006)は子供向けのファンタジー小説の登場人物名を分析し、名前には意味論的(semantic)、記号論的(semiotic)、そして音象徴的(sound symbolic)機能があり、作品の中でキャラクターの性格をほのめかしたり、コミカルな効果などを与える重要な役割を果たして

いると主張しているが、その点では、固有名詞や地名も同様であると考えられる。

また、固有名詞と地名は広い意味での文化関連語彙に属していることから、異なる言語体系と文化から来る背景知識の不在という面からも、その翻訳には異文化コミュニケーションにおける調整のための翻訳戦略が見られる。

実際の分析からも固有名詞と地名が指示機能だけを持っている場合は、両 TT ともに音訳が用いられることがほとんどであったが、指示以外の機能を持つ場合には、KT、ET ともに異文化コミュニケーションのための様々な方法が取られていた。一般には、KT では異文化の差を訳注などの解説を用いて訳していることが目立つが、場合によっては同化や加筆の方法も取られている。他方 ET では訳注を使わず同化を中心に加筆やパラフレーズの方法が用いられており、省略もしばしば見られる。また、ここでも ET で自国化翻訳方法が取られている箇所が KT では異国化翻訳方法で訳されていたり、またその逆の場合も見られることから、ST 文化圏との距離や言語体系の差が TT の翻訳方法に何らかの影響を与えていることがうかがえる。以下、具体例を挙げながらそれぞれの翻訳方法を分析する。

4.7.1. 固有名詞

まず、固有名詞の中で人名の翻訳の例から見ていくと、KT では例えば例(8)に見られるように ST の人名をそのまま訳しているのに対し、ET では全ての ST の人名を ET の慣習に合わせて名前と名字の順番に変えていることが分かる。KT では日本語 ST のみならず、外国人の名前は変更せずに訳すという異国化翻訳が原則となっているが、ET では人名の翻訳には自国化翻訳が取られていると思われる。

次の例(62)は名前に込められている意味が問題になる例である。ST のミドリという名前には「緑色」、そして「桃子」には桃から来た「ピンク色」という情報が各々込められているが、TT では音訳だけではその意味が分からないため、それぞれ加筆などの方法を取って訳されている。まず、KT では「cholak-sayk-ilanun ttus-ulo(緑色という意味の)」とその意味を伝えた後、「mitoli(緑)」と音訳後に漢字を付けて情報を加えている。また、「桃子」にも「momokho(桃子)」の音訳に漢字を付けることで「桃」と「ピンク色」との間に何らかの関連性を結び付けている。一方、ET では「Midori」と音訳してから、「Green」と意味を加えており、「Momoko: 'Peach girl」と音訳後に「桃」と「子」を借用翻訳することで KT と同じく「Peach」と「ピンク色」を結び付けている。この

ように、STと同じ漢字文化圏に属しているKTでは漢字を移植するという方法が、そしてETでは珍しく借用翻訳という方法が取られていることから、言語体系の差異も翻訳方法の選択に影響を与えていることが見て取れる。

(62) [ST] 「私ね、ミドリっていう名前なの。それなのに全然緑色が似合わないの。
(...)ねえ、私のお姉さん桃子っていうのよ(...)」
「それでお姉さんはピンク似合う？」(村上、99)

[KT] “Nay ilum-un **cholok-sayk-ilanun ttus-ulo mitoli**(緑)-ya. Kulenteyto
私の 名前-は 緑-色-という 意味-の ミドリ-なの なのに
cenhye cholok-sayk-i an ewullye. (...) kulentey malya, wuli enni-nun
全然 緑-色-が ない 似合う ところで ね 我が 姉-は
momokho(桃子)-lako hay.(...)”
桃子-と いうの
“Kulem enni-nun phingkhu-ka ewullikeyssney?” (94)
では お姉さん-は ピンク-が 似合うでしょう

[ET] “My name’s **Midori**, she said. “**Green**’. But green looks terrible on me.”
(...)My sister’s name is Momoko: ‘Peach girl’.”
“Does she look good in pink?” (68)

例(63)でも ST文化との距離による翻訳方法の差が見られる。例(63)はイタリア人の名前である「キリコ」を主人公が日本人の女性の名前に間違える場面であるが、KTではそれを「**Khiliko**」と音訳だけで訳している。韓国では日本人の女性の名前に「**ko**」という発音が多いことがある程度知られているため、その場面に情報を加える必要はないと判断したと思われる。これに対し、ETでは「**mistaking the name “Chirico” for the Japanese “Kiriko.” “It’s not a Japanese woman!”**」と、詳しく加筆している。

(63) [ST] 「へえ……女流画家って、変な絵を描くんだな」(...)
「キリコは女性の名前じゃないんだ。イタリアの素晴らしい画家だよ。(...)」
(宮部、74)

[KT] “Heyey…… yelyu hwaka-nun cham isanghan kulim-ul kulinun-kwuna.” (...)
 へえ 女流 画家-は 本当に 変な 絵-を 描くん-だな
 “**Khiliko**-nun yeca ilum-i aniya. Ithallia-uy hwullyunghan
 キリコ-は 女子 名前-が じゃない イタリア-の 素晴らしい
 hwaka-ci. (...).” (70)
 画家-だ

[ET] “Women sure paint strange pictures,” muttered Mamoru, **mistaking the name “Chirico” for the Japanese “Kiriko.” “It’s not a Japanese woman!”** Yoichi had laughed, and Mamoru was sure it was the first time he had ever seen him doing so. “He’s a wonderful Italian artist. One of the first surrealists.” (49)

次の例(64)は名前を利用してあだ名を付けるといういわゆる名前の「意味論的機能」が込められている場合であるが、言語体系の異なる TT でその機能を生かすことはほぼ不可能であるため、両 TT でもそれぞれ異なる方法が取られている。まず、KT では「能崎」から「能なし」につながる過程の中で、その音声面は省略して「mwunung sensayng(無能先生)」と意味だけをパラフレーズで訳している。一方、ET では「Nonashi, or “Mr. Incompetent」と一旦音訳してからパラフレーズでその意味を伝えているが、「Nonashi」と「Mr. Incompetent」との関連性までは伝えられていない。

(64) [ST] 生徒たちからは、名字の「能崎」をもじって「能なし」と呼ばれている。
 (宮部、34)

[KT] Haksayng-tul-eykeynun ilum-in ‘Nocakhi’ pota ‘**mwunung sensayng**’ ilako
 学生-たち-には 名前-の 能崎 より 無能 先生 と
 pwulliko iss-ta. (34)
 呼ばれて いた

[ET] His name was Mr. Nozaki, but the students called him **Nonashi, or “Mr. Incompetent.”** (25)

さらに、例(65)を見ると、両 TT ともに ST の要素が省略され、それぞれ同化とパラフレーズの方法が用いられている。例(65)では ST の「赤塚不二夫の漫画に出てくるハタ坊」が背景知識としてどれくらい髪の毛を切ったかを知らせる情報を与えているが、それを KT では「mak cophok-ey ipmwun-han colttayki(ちょうど組暴に入門したちんぴら)」と同化を用いて訳しており、また ET でも「Boyish, like a buzz cut」とパラフレーズで訳している。ここではおそらく TT 文化では見慣れない視覚的イメージを他の方法で伝えることは難しいため、同化やパラフレーズが使われていると思われる。

(65) [ST] 髪を切った。どれくらい切ったかという、昔読んだ赤塚不二夫の漫画に出てくるハタ坊くらいに短く切った。(奥田、175)

[KT] Melikhal-ul callass-ta. Enu cengtolo callass-nya hamyen,
 髪の毛-を 切った どれくらい 切った-か という
 mak cophok-ey ipmwun-han colttayki mankhum ssaktwuk! (65)
 ちょうど 組暴に 入門-した ちんぴら くらい ちょきり

[ET] She got her hair cut. **Boyish, like a buzz cut.** (144)

次に見られる例(66)は ST 文化に属する人物の名前が情報として出ている場合であるが、同じ「長嶋監督」という固有名詞が KT と ET でそれぞれ異なる理由で省略されていることが分かる。まず、例(66a)を見ると、「甲高い声」の例えとして「長嶋監督」の名前が出ているが、KT ではそれを省略して「yeki-ka mwusun siktang-ilato toynun keya(ここがなんと食堂でもなるのか)」と全く違う内容で同化を計っていることが見られる。KT では KT 文化にはなじみの薄い「長嶋監督」とそこから得られる聴覚的イメージを省略し、韓国の病院では普通とは思われない「いらっしゃーい」という挨拶言葉を用いて、テキスト内の結束性を優先した同化の方法が取られているのではないかと推測される。これに対して、ET では「Nagashima」とまず ST の固有名詞を音訳してから「the Yomiuri Giants coach」とその人物についての情報を加筆している。

一方、例(66b)では逆に ET の方で「長嶋さん」という固有名詞が省略され、別の内容で同化が行われている。これは例(7)でも見られた肩書きを使った呼称の問題だと思われるが、「監督」という肩書きが映画監督にも野球監督にも同じく使われることを利

用した ST の描写を ET でそのまま生かすのは無理があることから、ET では ST と同じ効果を与えるために ST の内容とは関係がないものの、「figure」の持つ二重の意味を利用した、「Angelina Jolie's figure」という同化の方法が用いられていると思われる。これに対し、KT では「監督」の肩書きが ST と同じように使われているため、「caienchu-uy nakasima kamtok」と音訳に加筆で情報を加える方法を取っており、ここでも言語差による翻訳方法の違いが見られる。

(66a)[ST] 恐る恐るドアをノックすると、中から「いらっしゃーい」という甲高い声が聞こえた。なんだか長嶋監督みたいだ。(奥田、8)

[KT] Cosimsulepkey nokhu-lul hayssteni, “Ese oseyyo” lanun saytoyn moksoli-ka
おそるおそる ノック-を したら いらっしゃいませ という 甲高い 声-が
tullyewass-ta. **Yeki-ka mwusun siktang-ilato toynun keya.** (129)
聞こえてき-た ここ-が なんと 食堂-でも なる のか

[ET] He knocked timidly on the door, and a high-pitched “Hello, hello! Come right in!” rang out from inside. The voice sounded a bit like **Nagashima, the Yomiuri Giants coach.** (7-8)

(66b)[ST] エミリンは馬鹿だった。映画のオーディションなのに、「好きな監督は？」という質問に「長嶋さん」と答え、失笑を買っていた。(奥田、171)

[KT] Eymilin-un yeksi mengcheng-hayssta. Yenghwa otisyen-intey,
エミリン-は やはり 馬鹿-だった 映画 オーディション-なのに
“Cohahanun kamtok-un” ilanun mulum-ey “**Caienchu-uy Nakasima**
好きな 監督-は との 質問-に ジャイアンツ-の 長嶋
kamtok-ipnita” lako taytap-haye wusumkeli-ka toyessta. (61)
監督-です と 答え-て 物笑いの種-に なった

[ET] Emilin was idiotic. They asked her to name an inspirational figure from the cinema, and she said that **Angelina Jolie's figure** was probably the most inspirational she'd ever seen. The judges hooted with laughter. (141)

次に見られる例(67)では KT と ET の翻訳戦略の差が明らかになっている。例(67)の「君が代」と、その歌詞である「さざれ石のおー」、「まあで一」の翻訳方法を比べてみると、KT ではまず、固有名詞は「kimikayo(ilpon kwukka-yekcwu)(キミガヨ(日本の国歌-訳注))」と音訳してから訳注を付けて説明し、歌詞の部分は「sasaley isinoo-」と「maatey-」のようにそのまま音訳だけで訳しているなど、ST の異化的要素が TT ではつきりと生かされていることが分かる。これに対し、ET では固有名詞は「May Our Lord's Reign」と逐語訳してから、歌詞も「Until pebbles turn to boulders」と「And be covered with moss」のように ST に出ていない部分までパラフレーズに近い方法で訳しており、ST の異化的効果よりは自国化戦略の手法が取られていると思われる。

(67) [ST] 君が代。そして旗がするするとポールを上がって行く。「さざれ石のおー」というあたりで旗はポールのまん中あたり、「まあで一」というところで頂上にのぼりつめる。(村上、26)

[KT] <Kimikayo (ilpon kwukka-yekcwu)> ka wullinun tongan, kwukki-ka
君が代 日本 国歌-訳注 が 流されている 間 国旗-が
maykkulepkey keyyangtay-lo ollakanta. “Sasaley isinoo-” hanun
滑らかに 掲揚台-へ 上がっていく さざれ 石のお という
taymok-eyse kwukki-nun keyyangtay-uy hankawuntay-ey iluko,
ところで 国旗-は 掲揚台-の まん中-に 至り
“maatey-” hanun taymok-ey ilu-myen cengsang-ey tahnun-ta. (29)
まあで という ところ-に 至る-と 頂上-に 着く

[ET] “**May Our Lord's Reign...**” And up the flag would climb. “Until pebbles turn to boulders...” It would reach halfway up the pole. “And be covered with moss.” Now it was at the top. (14)

続いて、KT では例(68)から例(70)のように、訳注を付けて固有名詞の持っている意味や情報を伝えるという特徴が見られるが、ET では訳注を付けずにそれぞれ加筆やパラフレーズなどを用いて訳す場合が多い。まず、例(68)を見ると、「陸軍中野学校」の情報を KT では「yukkun nakhano hakkyo(陸軍中野学校)」と固有名詞を逐語訳してから、

「中野學校, cey2cha seykyey-taycen ttay-uy suphai yangseng kyoyuk-kikwan-yekcwu(第二次世界大戦時のスパイ養成教育機関-訳注)」と漢字と訳注を付けて解説している一方、ET では本文内で「the wartime Nakano spy school」と加筆する方法が取られている。

(68) [ST] この人物は陸軍中野学校の出身という話だったが、これも真偽のほどはわからない。(村上、25)

[KT] Ku sakam-i yukkun Nakhano hakkyo (中野學校, cey2cha seykyey-taycen その人-が 陸軍 中野 学校 (中野学校 第2次 世界-大戦 ttay-uy suphai yangseng kyoyuk-kikwan-yekcwu) chwulsin-ilanun iyaki-to 時-の スパイ 養成 教育-機関-訳注 出身-という 話-も issess-ciman, yeksi sasil yepwu-nun alswuepsta. (29) あった-が やはり 事実 可否-は わからない

[ET] People whispered that he was a graduate of **the wartime Nakano spy school**, but no one knew for sure. (13)

また、例(69)でも「東急ハンズ」という店の持つ情報を KT では「tokhyuhancu (yekcwu, Tokyu Hands, caphwa paykhwacem)(東急ハンズ(訳注, Tokyu Hands 雑貨百貨店))」と固有名詞をそのまま音訳してから、英語名と訳注を付けて与えているが、ET では固有名詞を省略して「a home improvement store」のように店の情報だけをパラフレーズで訳している。

(69) [ST] 東急ハンズでゴムパッキンを購入し、新品と交換したが、それでも不安が消えなかった。(奥田、254)

[KT] Tokhyuhancu (yekcwu, Tokyu Hands, caphwa paykhwacem) eyse komwu 東急ハンズ 訳注 雑貨 百貨店 で ゴム phaykhing-ul sataka kyohwan-hayssciman, kulayto pwulan-un パッキング-を 買って 交換-したが それでも 不安-は

kasici anhass-ta. (280)

消え なかった

[ET] He had bought some rubber tubing at a **home improvement store** and used it to replace the old fittings. But his fear had not lessened. (204)

そして、例(70)を見ても KT と ET では「新幹線」と「ひかり」の翻訳方法に違いがあることが分かる。まず KT では「新幹線」は「sinkhanseyn」と音訳だけで、「ひかり」は「hikhali (sinkhanseyn-uy han conglyu-yekcwu)(ひかり(新幹線の一種-訳注))」と音訳してから訳注を付けて解説するという方法が取られているのに対し、ET ではそれぞれ「a bullet-train」と「*Hikari express*」のようにパラフレーズと音訳に加筆するという方法が用いられている。

ET では他のところでも「新幹線」は音訳せずに「a bullet-train」で訳しており、また、例えば「青函連絡船」(村上、260)のような固有名詞も KT では「seyikhan(青函)yenlaksen(連絡船)」(439)と音訳に漢字を付ける方法が一般的に取られているのに対し、ET では「the ferry to Hokkaido(385)」のように固有名詞を省略してパラフレーズだけで訳す傾向が強い。

(70) [ST] (...)京都までの**新幹線**自由席の切符を買い、いちばん早い「ひかり」に文字どおりとび乗り、(...)。(村上、167)

[KT] (...)Kyotho-kkaci kanun **sinkhanseyn** cayusek phyo-lul san taum,
京都-まで 行く 新幹線 自由席 切符-を 買った 後
ceyil ppalun ‘hikhali (sinkhanseyn-uy han conglyu-yekcwu)’ ey
いちばん 早い ひかり 新幹線-の 一 種類-訳注 に
mal kutaylo ttwie olla thako-nun, (...). (150)
言葉 通り 走り 乗り 込ん-で

[ET] (...) bought a **bullet-train** ticket to Kyoto, literally jumping onto the first *Hikari express* to pull out. (118)

次の例(71)は、言語体系だけではなく書記体系の差による翻訳方法の違いが表れている好例であると思われる。日本語の場合、その表記法が漢字とカタカナ、ひらがなの組み合わせによって非常に複雑で多様な形になっており、そこから伝えられるニュアンスや暗黙的効果も様々であると思われるが、表記体系の違う TT の場合、そのような意味論的機能までも生かして訳すことはなかなか容易なことではない。

そのため、TT でも種々の方法が用いられているが、ここでは書記体系が英語よりは日本語に近いと言える KT で ST の効果がそれなりに伝えられている例を紹介する。例(71)では、「阿美寮」という療養施設の名前が出ているが、ST では「阿美寮」という表記からすぐには読み取れない意味や奇妙さが、たぶん「ami」というフランス語の発音から来た名前ではないかと推測するまでの過程が表れている。

KT ではこのような流れをまず「Amilyo(阿美寮)」と音訳して漢字を付けた後、フランス語の「ami」にも訳注を付けてより詳しく説明することで、ST とほぼ同じ過程をたどる効果が得られていると思われる。一方、ET でははじめから「*Ami Hostel*」と表記されているため、フランス語から来たという意味は伝えられるものの、表記から得られる効果は自然と省略されることになり、ST との書記体系の差によって TT の制約にも違いが生じることが見て取れる。

(71) [ST] 封筒の裏の住所には「阿美寮」と書いてあった。奇妙な名前だった。僕はその名前について五、六分間考えをめぐらせてから、これはたぶんフランス語の ami(友だち)からとったものだろうと想像した。(村上、165)

[KT] Pongthwu twismyen-uy cwuso-eynun ‘Amilyo(阿美寮)’ lako ssuye issess-ta.
 封筒 裏面-の 住所-には 阿美寮 と 書いて あつ-た
 Myohan ilum-iessta. Na-un ku ilum-ey tayhay 5,6pwun tongan
 妙な 名前-だった 私-は その 名前-に ついて 5,6分 間
 twulwutwulwu sayngkakhay pon kkuth-ey, iken ama phulangsu-e-uy
 いろいろ 考えて みた 末-に これは 多分 フランス-語-の
 ami (chinkwu-lul ttus-hanun ‘ami’ lanun phyoki-eyse on mal-yekcwu)
 ami 友達-を 意味-する という 表記-から 来た 言葉-訳注

lopwute ttaon key anilkka hako sangsang-hayssta. (148)

から とった の ではないか と 想像-した

[ET] The return address on the back said *Ami Hostel*. An odd name. I thought about it for a few minutes, concluding that the “ami” must be from the French word for “friend”. (116)

なお、例(72)は KT よりむしろ ET の方でよく知られていると見られる固有名詞の例である。例(72)では、「オール・ブラックス」というニュージーランドのラグビー代表チームの名前が出ているが、ET では ST と同じく「All Blacks」だけで訳しているのに対し、「オール・ブラックス」のことがあまり知られていない KT では「ol pullayksu」と音訳してから、訳注を付けて「nyucillayntu lekpi tayphyo-thim-uy ayching(ニュージーランドラグビー代表チームの愛称)」と解説する方法が取られている。

(72) [ST] 「僕にはそれ、ラグビーの全日本チームがオール・ブラックスと対戦したときの様子に思えるな」(宮部、233)

[KT] “Ce-hantheynun kuke, lekpi ilpon-thim-i ol pullayksu
僕-には それ ラグビー 日本-チーム-が オール・ブラックス
nyucillayntu lekpi tayphyo-thim-uy ayching wa taycen-hayssul
ニュージーランド ラグビー 代表-チーム-の 愛称 と 対戦-した
ttay-uy mosup-ulo poinun-teyyo.” (222)
時-の 様子-に 見える-ですが

[ET] “It sounds like the Japanese national rugby team having to play the **All Blacks**.” (145)

加えて、例(73)では ST の「おじいさんの古時計」という歌のタイトルが両 TT ともに省略されているが、このように両 TT でともに省略される固有名詞の例は他にもいくつか見られる。おそらくその固有名詞が持っている情報・含意の重要度やコンテキスト内に他の代替要素が存在しているなどの要因が影響していると考えられるが、省略

の一貫性や重要度の判断基準などについては今後更なる考察が必要になると思われる。

(73) [ST] もう、私にはなににもできない。出ていっちゃうことの他にはなにひとつ—
思わず、おじいさんの古時計を口ずさんでしまいながら、私は冷蔵庫をみ
がいていた。(吉本、32)

[KT] Icey na-nun amwukes-to halswuepsta. I cip-ul nakanun kes oy-ey
もう 私-は 何-も できない この 家-を 出る こと 外-に
mwues hana—na-to molukey **khos-nolay-lul** hungelkeli-mye
何 一つ 私-も 知らず 鼻-歌-を 歌い-ながら
nayngcangko-lul takkass-ta. (32)
冷蔵庫-を みがい-た

[ET] There was nothing I could do to chang it. Other than turning around
and leaving, there was only one thing to do—**humming a tune**, I began
to scrub the refrigerator. (22)

4.7.2. 地名

地名の翻訳にも固有名詞の翻訳の場合と同じく、暗黙の情報や意味が含まれている
ときには KT と ET で翻訳方法が異なる。また、ET では詳しい地名が省略されること
もしばしばある。まず例(74)のように地名にある情報がのせられている場合から見てい
くと、例(74)では「豊島区」と「千代田区三番町、港区元麻布、大田区田園調布、世田
谷区成城」という互いに対比するイメージを暗示している地名が出ているが、KT では
まず豊島区を「Thosima ku」と音訳しつつ、その他の地名には「choykokup cwutaykci-lanun
(最高級住宅地という)」という情報を加筆した上で「Chiyota kwu 3penka, Minatho kwu
Mothoacapwu, Ootha kwu Teyneynchohwu, Seythakaya kwu Seyico」と ST の地名を全て音
訳している。

これに対して、ET では「豊島区」は「a middle-class neighbourhood like Toshima」
と情報を加えて音訳しているが、それに対比する地名は全て省略して「a rich area」
とパラフレーズだけで訳しており、ST の異化的要素である地名をそのまま生かしてい
る KT との戦略の差異が見られる。

(74) [ST] 私の学年百六十人の中で豊島区に住んでいる生徒って私だけだったのよ。
 (...)千代田区三番町、港区元麻布、大田区田園調布、世田谷区成城...もう
 ずうっとそんなのばかりよ。(...)」(村上、114)

[KT] Wuli haknyen 160myeng cwung Thosima ku-ey salko issnun haksayng-un
 我が 学年 160 名 中 豊島区-に 住んで いる 学生-は
 na-ppwun-iessta-kwu. (...) choykokup cwutaykci-lanun Chiyota kwu
 私-だけ-だった-の 最高級 住宅地-という 千代田区
 3penka, Minatho kwu Mothoacapwu, Ootha kwu Teyneynchohwu,
 3 番 街 港区 元麻布 大田区 田園調布
 Seythakaya kwu Seyico..... ayu, cwuwuk kulen kos ppwunin
 世田谷区 成城 もう 全部 そんな ところ ばかり
 keya. (...) (106)
 なの

[ET] Out of 160 girls in my class, I was the only one from a **middle-class neighbourhood like Toshima** (...) and every single one of them was from **a rich area**. (79)

また、例(75)でも ET で地名が省略されている。ST では大型スーパー「ローレル」の城東店という地名が出ているが、KT では「Cyothocem 店」と地名を音訳してから店を意味する漢字を付けてそれが地名であることを明らかにしている。他方、ET では「城東店」という地名を省略して、固有名詞の「Laurel」だけを音訳で訳している。このように具体的な地名を省略する方法は ET でしばしば見られる特徴である。

(75) [ST] 翌日は土曜日だったので、午前中の授業が終わると、守はその足で、学校から二つ先の駅前のある大型スーパー、「ローレル」城東店に向かった。
 (宮部、64)

[KT] Taum nal-un thoyoil-iesski ttaymuney Mamolwu-nun ocen swuep-i
 翌日-は 土曜日-だった ので 守-は 午前 授業-が

kkuthnacamaca hakkyo-eyse twu cengkecang ttelecin yek aph-ey issnun
 終わると 学校-から 二 停車場 離れた 駅 前-に ある
 tayhyeng syuphe, ‘Loley’ **Cyothocem** 店 ulo hyanghayss-ta. (61)
 大型 スーパー ローレル 城東店 へ 向かつた

[ET] The next day was Saturday, and Mamoru only had a half-day of classes. As soon as school was over he headed for Laurel, a large department store two stations away. (43)

また ET では ET 文化でより知られている上位語(hypernym)を用いて同化の方法で訳す傾向も見られる。例えば、例(76)の「歌舞伎町」は「新宿にある有名な繁華街」のような情報が込められているが、KT ではそれをそのまま「Kapwukhicho(歌舞伎町)」と音訳してから漢字を付ける方法が取られているのに対し、ET では「歌舞伎町」が位置する「Shinjuku」というより大きい単位の地名に代替して訳している。

他にも、ST の「有楽町」(宮部、303)を KT では「Yulakhwuchyo(有楽町)」(289)と音訳しているのに対し、ET では「Ginza」(189)に置き換えているなど、ET では KT とは異なって具体的な地名よりは TT 文化でより知られている地名を用いて訳す傾向があると思われる。

(76) [ST] 化粧も服装もごくまともで、朝の五時前の歌舞伎町をうろうろしているようなタイプには見えなかった。(村上、152)

[KT] Hwacang-to oschalim-to swuswu-hayssko, achim tases si cen-ey
 化粧-も 服装-も 平凡だったし 朝 五 時 前-に
Kapwukhicho(歌舞伎町)lul heymayko tanil thaip-ulonun poici
 歌舞伎町-を さまよって いる タイプ-には 見え
 anhass-ta. (137)
 なかつた

[ET] Both were reserved in the way they dressed and made up: they were definitely not the type to be wandering around **Shinjuku** at five in the

morning. (106)

なお、STの地名が両TTで同時に省略され、他の方法で訳されている場合もある。例えば例(77)ではSTの地名がKTとETでそれぞれパラフレーズと同化の方法で変更されているが、「「ハワイ旅行」という海外旅行どころか、国内の温泉地である「熱海」にも連れて行かない」のような対比の意味で使われている「熱海」という地名が両TTともに省略され、他の場所で代替されていることが分かる。まず、KTでは「熱海」が「tongney onchen(町温泉)」になって「熱海」の持つ意味だけが生かされたパラフレーズで訳されており、一方のETでも「Tokyo Disneyland」という完全に別の場所に換えられているなど、両TTともにテキスト内でその地名が与える効果だけを優先して訳している例が見られる。

(77) [ST] 「...そこは看護婦を『ハワイ旅行つき』って募集して、**熱海**にも連れてかないんだよね」(奥田、244)

[KT] “(...) ‘Hawai yehayng’ul coken-ulo kanhosa-lul mocip-hay nohko
ハワイ 旅行-を 条件-で 看護師-を 募集-して おいて
Tongney onchen-eyto an teyliko kanta-nun keya.” (269)
町 温泉-にも ない 連れて 行く-と いう

[ET] “(...)But over there they recruit nurses by offering them free trips to Hawaii and then don’t even send them as far as **Tokyo Disneyland.**”
(195)

以上の分析結果から固有名詞と地名の翻訳方法をまとめてみると、まずKTでは加筆や同化のような方法も取られてはいるが、STの異化的要素を音訳とともに訳注を付けてなるべく伝えようとする異国化翻訳の傾向が強い。一方、ETではSTの異化的要素を主に同化や加筆、パラフレーズの方法を用いて訳しており、度々省略も見られるなど自国化翻訳方法の傾向がうかがえる。このような翻訳戦略の違いは先に述べた翻訳規範の差異からも出ていると思われるが、やはり各々のTTとST文化圏との距離、そして言語体系の差からも影響を受けていると考えられる。

ここで、固有名詞・地名についての翻訳方略をまとめておく。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	40	224	0	33	5	6	12	7	9	336
ET	7	183	1	25	17	48	26	18	0	325

表9 固有名詞・地名の分析結果

4.8. 文化関連語彙

STの文化と深く関連している特殊な語彙を呼ぶ用語とその定義については学者によって様々な意見が提示されており、未だ見解の一致を見ていないが、その概念と対象となる語彙はほぼ共通していると言える。

金ジェヒ(2008)によれば、文化関連語彙について、Hagfors は「Culture-Bound Elements」、Ordudary は「Culture-specific concepts, CSCs」、そして Federici は「Culture-bound terms」という用語をそれぞれ使用しているが、その定義は「ST文化圏に特定の概念、制度又は人物を称する用語」とまとめられると言う。

また、李(2005)は、「文化関連語彙(culture-bound terms)とは、SLを使用する社会共同体の歴史・社会・経済・政治・言語慣習などをめぐる特定で固有な文化から生まれた語彙のことである」と定義し、その種類を ①固有名詞 ②特定の文化と関連した語彙 ③特定の事件や人物と関連した語彙 ④慣用語 ⑤度量衡単位に分類している。

ただし、本節で扱う文化関連語彙は李の分類で言えば、②特定の文化と関連した語彙と⑤度量衡単位に当たるより狭い意味での文化関連語彙に限定する。

このような文化関連語彙は ST の文化と密接な関係を持つため、その文化の歴史や社会的慣習などに関する背景知識がない限り、それと関連した語彙と内容の理解は決して容易なことではない。そのため、文化関連語彙の翻訳は異文化コミュニケーションにおいては最も越えがたい壁でもあり、異なる文化的背景を有する各 TT の翻訳戦略とそれによる翻訳方法の差が最も明確に表れるところでもあると思われる。

文化関連語彙の翻訳には両 TT とともに自国化戦略と異国化戦略の方法がそれぞれ多く使われていたため、カテゴリー全体に一貫した基準は見られないが、ST の異化的要素が KT と ET とともにまったく見慣れない異質なことである場合、KT では異国化戦略が取られているのに対し、ET では自国化翻訳が用いられるという特徴は見られる。

なお、文化関連語彙の翻訳で注目したい点は、ST文化との距離による翻訳方法の差がこれまでとは逆の方向に表れたことである。つまり、これまではETよりST文化と近いと思われるKTでは主に異国化方法が取られていたのに対して、ETでは自国化方法が取られるという例が種々見られたが、文化関連語彙の場合、例えば「食」関連語彙のようにかえってKTの方で同化のような自国化翻訳が取られ、ETでは音訳などの異国化翻訳が用いられていた。以下、文化関連語彙を伝統・慣習と社会・文化、衣食住、度量衡単位に分けて、具体的な事例を見ていく。

4.8.1. 伝統・慣習

まず、STの伝統や慣習から生まれた文化関連語彙の例を見ると、例(78)のように一方のTTに類似した風習がある場合は、やはり翻訳方法が異なってくるのが分かる。例(78)では「七夕」という年中行事が出ているが、KTの場合KT文化にも日本と若干の違いはあるものの、「七夕」という風習があるため、そのまま「chilsek」と逐語訳で訳している。これに対し、そのような風習のないETでは「The Weaver Festival」とパラフレーズの方法が取られている。

(78) [ST] 「(...)知っている人は七夕現象と呼ぶ。(...)」(吉本、195)

[KT] 「(...)alko issnun salam-tul-un **chilsek** hyensang-ilako hayyo.(...)」(190)
知 っ て い る 人 - ち ち - は 七 夕 現 象 - と い う

[ET] “(...)People who knows about it call it ‘**The Weaver Festival Phenomenon**’.” (147)

一方、STの要素が類似したTTの文化関連語彙に置き換えられている例もしばしば見られる。例(79)の「大晦日」の場合、KTでは同じ日のことを「settal kumum」と呼ぶため、そのとおりに訳されている。他方、ETでも「New Year's Eve」という表現はあるが、ここでは「大晦日」は省略され、文脈の中で「this evening」と訳されている。なお、両TTの文化でともに異化的要素であるSTの「初詣」は、KTでは「sayhay champay (新年参拝)」、そしてETでも「visiting the local shrine」というようにどちらもパラフレーズが用いられている。

(79) [ST] 「僕は、大晦日は閉店して、新年の朝早くに店を開けるつもりなんです。
はつもうで
初詣帰りのお客が寄ってきますからね。(…)」(宮部、302)

[KT] “Ce-nun settal kumum-nal-un kakey mwun-ul tatko, sayhay achim ilccik
私-は 大晦日-は 店 門-を 閉め 新年 朝 早く
kakey-lul yel sayngkak-ieyyo. **Sayhay champay**-lul machiko tolakanun
店-を 開ける つもり-です 新年 参拝-を 終え 帰る
sonnim-tul-i tulle cwul theynikkayo.(…)” (287-8)
お客さん-ら-が 寄って くれ ますから

[ET] “I’ll close this evening and then open up after midnight when the date changes to New Year’s Day. Customers stop in on their way back from **visiting the local shrine**. (…).” (188)

また、例(80)を見ると、KT、ETともにSTの「通夜」は省略され、「葬式」だけが訳されている。KT文化ではSTと同じく「通夜」をする風習はあるが、それだけを指す特別な語彙は存在せず、「通夜」を含む一連の儀式が「canglyey」と呼ばれるため、KTでは「通夜」を省略し「canglyeysik」だけで訳していると見られる。一方のETでも「通夜」は省略され、「the funeral」と翻訳されているが、ET文化では「通夜」の風習が一般的とは言えないため、同じ省略の方法であってもその理由はそれぞれ異なると思われる。

(80) [ST] 「はい。今日の午後、とりあえず実家へ連れて帰ります。^{つや}通夜も葬式もあ
ちらであげることにしてありますもんで」(宮部、41)

[KT] “Ney. Onul ohwu-ey wusen ponka-lo teyllye-kal keyeyyo.
はい 今日 午後-に まず 本家-へ 連れて-行き ます
Canglyeysik-to ku ccok-eyse chilukey toyey issese.” (40)
葬式-も その 側-で 行うこと-に なって いて

[ET] “We’re taking her back home with us this afternoon.
That’s where we’re going go have **the funeral**.” (29)

続いて、STの文化が両TTにとって明らかに異化的要素であるときの翻訳方法の差異を見ていく。まず、例(81)では「神社」と「鳥居」という語彙が出ているが、KTでは「神社」は「sinsa」と逐語訳した後、「鳥居」は音訳せずに、おそらくその形から「kitwung (柱)」と置き換えている。これに対し、ETでは「神社」はほぼ逐語訳に近い「Shinto shrines」と訳してから、「鳥居」も「the torii gates」と音訳に加筆を加える方法が取られており、ここではETの方がよりSTの異化的要素を生かしていると思われる。

(81) [ST] 深く沈んだ暗い街並の民家の屋根に混ざって、小さな神社の鳥居がいくつも、いくつもあった。(吉本、130)

[KT] Kiphi camtun etwuwun keli, minka-uy cipwung-ey sekkye cokuman
 深く 眠る 暗い 街 民家-の 屋根-に 混ざって 小さな
 sinsa-uy kitwung-i yekiceki se issess-ta. (127)
 神社-の 柱-が あちこち 立って いた

[ET] Immersed in the deep, dark night were rows of shops and houses. Mixed among the roofs of homes were the torii gates of numberless little **Shinto shrines**. (94)

そして、次の例(82)と例(83)は、STの異化的要素の翻訳においてKTとETの戦略の差が明らかに表れている好例であると思われるが、KTでは訳注を付けた解説を用いてSTの異質性を生かしているのに対し、ETではパラフレーズや省略のような自国化方法が取られている。まず、例(82)を見ると、互いに対比する例えとして「吉原」と「夜鷹」という語彙が出ているが、KTではそれぞれ「yosiwala」、「yothakha」と音訳してから訳注を付けて解説する方法が取られている。これに対してETでは「it's not the sort of girlie magazine you'd put out of the kids to thumb through」とSTの語彙が省略され、パラフレーズだけが用いられていることが分かる。

(82) [ST] 「彼の手元にも記録だけで現物がないそうだからなんとも言えないけど、『日本版プレイボーイ』を吉原だとすると、『情報チャンネル』は^{よたか}夜鷹みたいなもんだって」(宮部、135)

[KT] Ku salam-hantheyto kilok-man issko silmwul-i epsta-ko hanikka
 あの 人-にも 記録-だけ あって 実物-が ない-と いうから
 mwelako malhal swu epsiman, ilponphan 「phulleyipoi」 lul
 何とも 言う こと できないけど 日本版 プレイボーイ-を
yosiwala eyto sitey-uy kokup yukwak-lako hantamyen,
 吉原 江戸 時代-の 高級 遊郭-と すると
 「cengpochaynel」 un yothakha eyto sitay-ey kilkeli-eyse sonnim-ul kkulten
 情報チャンネル-は 夜鷹 江戸時代-に 路上-で 客-を 引く
hakup maychwunpwu kathun kelay.” (129)
 下級 売春婦 のような ものだって

[ET] “My boyfriend only has a record of having seen it. There aren’t any
 copies, so I really don’t know, but he said **it’s not the sort of girlie
 magazine you’d put out of the kids to thumb through.(...).**” (86)

また、例(83)でも儲かることなら何でも扱っている会社のことを ST で「ヌエ」に例
 えているが、KT ではまず「nwuey 鶴」とそのまま音訳して、漢字と訳注を付けて詳し
 く説明しているが、ET ではその比喩が完全に省略されている。このように、KT では
 解説が用いられているところが ET ではほぼパラフレーズか省略で処理されており、
 両 TT の翻訳戦略による方法の差を明らかにしている。

(83) [ST] 和子が今籍を置いている「イースト興産」は、ヌエのような^{からだ}身体で掃除機
 のような集金力のある会社だった。(宮部、161)

[KT] Kacukho-ka cikum ilhako issnun ‘Isuthuhungsan’un **nwuey 鶴,**
 和子-が 今 働いて いる イースト興産-は ヌエ
meli-nun wenswungi, mom-un nekwuli, kkoli-nun paym, tali-nun
 頭-は 猿 体-は 狸 尻尾-は 蛇 足-は
holangi-lul talmun censel-sang-uy yokoykathun mom-ey chengsoki
 虎-と 似ている 伝説-上-の妖怪 のような 身体-に 掃除機

kathun cakum swucip nunglyek-ul kacin hoysa-yessta. (153)

ような 資金 収集 能力-を 持つ 会社-だった

[ET] The company she worked for, East Cosmetics Inc., had the ability to suck up money like a high-powered vacuum cleaner. (102)

なお、例(84)のように両 TT でともにパラフレーズの方法が用いられる場合も見られる。例(84)では ST の「駆け込み寺」が、KT では「tomang-chil kos(逃亡するところ)」、そして ET では「A place of refuge」と訳されており、両 TT で同じくその語彙の意味だけをパラフレーズで訳していた。

(84) [ST] 駆け込み寺があるのはいいものだ。(奥田、279)

[KT] Tomang-chil kos-i issta-nun kes-to cohun il-ita. (309)

逃亡-する ところ-が ある-という の-も いい こと-だ

[ET] A place of refuge is a good thing for anyone to have. (224)

4.8.2. 社会・制度

ST の社会や制度などに関連した語彙には特に今の ST 社会の様子がかがえる今日的な語彙が多く、また異文化交流に伴う翻訳方法の変化が最も目立つところでもあると思われる。まず、一方の TT に類似した語彙が存在する場合の例から見ていくと、例(85)では ST の「桜前線」が KT では「peckkoch censen」と逐語訳されているのに対し、ET では「the cherry trees bloomed」のようにパラフレーズが用いられている上に、文章にも調整を加えている。韓国には ST 文化と同じく四季があり、春になると南の方から「桜前線が北上する」のような表現が使われているため、別途の説明がなくても枚川市が東京より北の方にあることが読み取れる。一方、ET ではそのような共通の背景知識がないため、「north of Tokyo」のような情報を加えてパラフレーズの方法が取られていることが分かる。

(85) [ST] 守の生まれた故郷は、東京よりも桜前線の訪れが一ヵ月ほど遅い、枚川と

ひらかわ

いう市だった。(宮部、15)

[KT] Mamolwu-ka thayenan kos-un Tokhyo-potato **peckkoch censen-i**
守-が 生まれた 所-は 東京-よりも 桜 前線-が
han tal-ccum nuckey chacaonun Hilakhawa-lanun si-yessta. (14-5)
1 ヶ月-ほど 遅く 訪れる 枚川-という 市-だった

[ET] Mamoru had been born and raised in the city of Hirakawa, north of Tokyo, where the cherry trees bloomed a little later than they did in the capital. (13)

次に、両 TT でともに異化的要素であると見られる語彙の例を見ると、まず例(86)では、「ある特定の分野に狂的なほど熱中している人」のような意味を持つ新語「オタク」が KT と ET でそれぞれ音訳と同化の方法で訳されている。KT では今や日本語から流入した「オタク」という用語が一般的に使われるようになり、その言葉が持つ意味やニュアンスも「othakhwu」だけでほぼ等しく KT 文化に伝えられる。他方、ET では ET 文化にある「nerdy types」という表現に置き換える同化を用いて訳している。

韓国では最近インターネットやメディアなどの影響で、このような日本語からの新造語の流入が数多く見られているが、例えばごく最近話題になっている「引きこもり」という語の流入過程を例にしてみると、最初は音訳の「hikhikhomoli」に詳しい訳注や解説が付けられていた。次の段階では「hikhikhomoli (untwunhyeng oytholi) (隠遁型一人ぼっち)」と簡単な訳注や解説が付けられるようになった。そして最後には、「hikhikhomoli」だけでも通じるようになる、というような段階を経て広まっていく様子が見られる。

「引きこもり」は今第 2 段階と第 3 段階の半ばくらいに来ていると思われるが、「オタク」は既に第 3 段階になって久しく、このような ST 文化との交流も KT と ET との翻訳方法の差異を決める一因になっていると考えられる。

(86) [ST] これまでもオタクに何度かつけ回されたことがある。(奥田、127)

[KT] Cikum-kkaci **othakhwu-ka** myech pen ttala-on cek-un issessta. (11)
これ-まで オタク-が 何 度 付いて-来た こと-は あった

[ET] She had been followed more times than she could count by **nerdy types**.(103)

続いて、例(87)と例(88)のように ST文化の社会制度と関わりのある用語の翻訳には、KT、ETともにパラフレーズが多く用いられている。まず、例(87)では ST文化の入試制度と関連した「偏差値」という用語が見られるが、各々異なる入試制度が取られている KTとETでは STの要素を生かすよりは「偏差値が低い」の意味だけをそれぞれ KTでは「kongpu-moshan ke(勉強できなかったの)」、そして ETでは「how low your test scores were」のようにパラフレーズを用いて訳している。

(87) [ST] それから、学校名は言わない方がいいよ。偏差値が低いのは、ばれるから。
(奥田、167)

[KT] Kuliko hakkyo ilum-un an taynun key coha. **Kongpu-moshan ke**
そして 学校名-は ない 告げ の いい 勉強-できなかったの
kunyang tulthong nal-theynikka. (58)
そのまま ばれ る-から

[ET] And you'd better not say anything about your school record either. You don't want to give away **how low your test scores were**. (139)

例(88)を見ても、ST文化で警察通報用電話番号として使用されている「一一〇番」も、KTとETともに TT文化に合わせた同化などの方法よりは、KTの「kyengchal-ul pwulle(警察を呼べ)」とETの「Call the police!」のようにパラフレーズの手法が取られている。また、他のところでも番号案内サービスの「一〇四番」(奥田、259)が、それぞれ「annay-ey cenhwa-lul kele(案内に電話をかけて)」(285-6)と「from directory assistance」(208)のようにパラフレーズで訳されている。

(88) [ST] 「おい、一一〇番だ」教授が叫んでいる。(奥田、119)

[KT] “Ei, **kyengchal-ul pwulle!**” kyoswu-ka oychyess-ta. (124)

おい 警察-を 呼べ 教授-が 叫ん-だ

[ET] “Quick,” screamed the older professor. “**Call the police!**” (99)

なお、例(89)のように ST の文字を利用した「文字遊び」を訳す場合は、KT と ET で翻訳戦略の差が明らかに異なる。例(89)では、ひらがなだけを利用して人の顔を描く文字遊びとして「つるさんはまるまるむし」と「へのへのもへじ」が出ているが、KT では「つるさんはまるまるむし」は「chulwu ssi-nun tongkultongkul pelley」と音訳と逐語訳で訳し、そして「へのへのもへじ」も「heynoheynomoheyci」と音訳でそのまま訳してから、両方ともページの下段に詳しい訳注を付けて説明を加えている。また、訳注にはひらがなを移植して説明することで文字から絵を描くイメージまでも伝えようとするなど、ST の異質的要素をなるべく紹介しようとする異国化戦略が取られていると思われる。

これに対し、ET では ST の構成と内容を換え、「つるさんはまるまるむし」と「へのへのもへじ」は省略し、「It was like graffiti than art, something he called *tsurusan*」のように「*tsurusan*」だけを音訳してから、パラフレーズで訳していることから、ST の文字遊びという異質的要素は最小限にして、TT の理解度を高めるという自国化戦略が取られている。

(89) [ST] 「『つるさんはまるまるむし』って、知ってるかい？」

「なんだって？」

「『へのへのもへじ』みたいな落書きだよ。」(宮部、190)

[KT] “‘**Chulwu ssi-nun tongkultongkul pelley**’* lanun ke ala?”

つる 氏-は まるまる むし という の 知ってる

“Kukey mwentey?”

それ 何なの

“**Heynoheynomoheyci**’** kathun nakse-ya. (...)” (180)

へのへのもへじ のような 落書き-だよ

* ‘つるさんはまるまるむし’ i yel-han kay-uy hilakana mwunca-lul iyong-hay, ‘heynoheynomoheyci’ chelem kulim-ul kulinun kulca noli.(この十—個—のひらがな文字—を利用—して、へのへのもへじのように絵—を描く文字遊び)

**‘heynoheynomoheyci へのへのもへじ’lanun ilkop kay-uy hilakana mwunca-manul sayonghay salam elkwul moyang-uy kulim-ul kulinun kulca noli. ‘heyheynonomoheyci’lakoto hanta. Aph-uy twu kay-uy ‘hey(へ)’ka yang nwunssep-ul, twu kay-uy ‘no(の)’ka twu nwun-ul, ‘mo(も)’ka kho-lul, sey pen-ccay ‘hey(へ)’ka ip-ul, ‘ci(じ)’ka elkwul yunkwak-ul kakkak nathanaynta.(へのへのもへじという七個—のひらがな文字—だけを使用して人顔模様—の 絵—を描く文字遊び。へのへのもへじともいう。前—の二個—のへが両眉—を、二個—ののが両目—を、もが鼻—を、三番目のへが口—を、じが顔輪郭—をそれぞれ表す)

[ET] “My Dad used to draw a funny picture when I was small. **It was like graffiti than art, something he called *tsurusan*.** I used to copy him, and he finally told me to draw something else, too. Trains or flowers or something. Then he sent me to a drawing class with one of my neighbors. (...).” (119)

4.8.3. 衣食住

STの文化がそのまま反映されている衣食住関連の語彙の翻訳には、同時に二つ以上の方法が取られている例が多く、また、ST文化との距離による翻訳方法の違いがこれまでとは逆の方向に表れた例も見られる。まず、「衣」関連彙語の例から見ていくと、例(90a)では「浴衣」と「丹前」というST固有の衣服の名称が両TTでそれぞれの方法で訳されている。KTでは「浴衣」は「yukhatha (mokyok hwu-ey ipnun ilpon-sik hoth myen-os-olmkini)(入浴後に着る日本式一重綿服—訳者)」のように音訳に訳注を加える方法が取られている反面、「丹前」は「tesos(上着)」と簡単なパラフレーズだけで訳されている。一方、ETでは「浴衣」は省略され、「丹前」のみが「padded winter kimonos」のようにパラフレーズで訳されている。同テキスト内の他のところでも「浴衣」は「bathrobe」で置き換えられているなど、その翻訳に自国化方法が用いられていることが分かる。

(90a)[ST] 浴衣の上に丹前を着た寒そうな酔っぱらいの観光客がたくさんいて、大声で笑いゆきかう。(吉本、122)

[KT] Yukhatha (mokyok hwu-ey ipnun ilpon-sik hoth myen-os-olmkini) wi-ey
浴衣 入浴 後-に 着る 日本-式 一重 綿-服-訳者 上-に
tesos-ul ipun swul chwohan kwankwangkayk-tul-i wukulwukul,
上着-を 着た 酒 酔った 観光客-たち-が うようよ
khun soli-lo wusumye okan-ta. (119)
大 声-で 笑いながら 行き来する

[ET] Drunken tourists were everywhere (looking cold in their padded winter kimonos), laughing loudly. (88)

ところが、例(90b)を見ると、今度は「浴衣」が KT では「yukhatha」と音訳だけになっており、ET でも「*yukata cotton kimonos*」と音訳に加筆という異国化により近い方法が取られている。例(90a)は KT が 1999 年、ET が 1993 年にそれぞれ翻訳されたテキストであり、例(90b)は KT が 2005 年、ET が 2006 年に訳された比較的最近のテキストであるが、時代の流れとともに培われてきた異文化コミュニケーションが翻訳方法の選択にも影響を及ぼしていることがうかがえる。

(90b)[ST] みんなが部屋に散り、浴衣に着替えて大浴場へと行く。(奥田、104)

[KT] Tatul pang-ulo huthecyey yukhatha-lo kalaipko taycwungthang-ulo
みんな 部屋-へ 散り 浴衣-に 着替えて 大衆湯-へ
kanta. (106)
行く

[ET] Everyone went off to their rooms, changed into the *yukata cotton kimonos* laid out in the rooms for this purpose, and went down to the big bath. (86)

なお、例(91)の「セーラー服」は ST 文化固有の語彙とは言えないが、ST 文化では

「女子中高生が着る学校の制服」との情報背景知識として込められているため、このような場合にも TT によって翻訳方法に差が出てくる。まず、KT では「セーラー服」が ST ほどとは言えないがある程度「女学生が着る服」のようなイメージがあるため、「seyille-pok chalim(セーラー服姿)」とほぼ逐語訳が取られている。これに対し、ET では「a sailor-style girl's high school uniform, complete with middy blouse and skirt」と ST の語彙に込められている情報を詳しく加筆して訳していることが見られる。

(91) [ST] 待ち合わせたデパートの四階の喫茶店に、学校帰りの柊は、セーラー服でやってきた。私は本当はとても恥ずかしかったが、彼があまり普通に店に入ってきたので平然を装った。(吉本、159)

[KT] Hilaki-nun yaksok cangso-in paykhwacem 4chung chascip-ey
 柊-は 約束 場所-の デパート 4階 喫茶店-に
 seyille-pok chalim-ulo nathanass-ta. Na-nun sasil-un com
 セーラー-服 姿-で 現われ-た 私-は 事実-は ちよつと
 changphi-hayss-ciman, ku-ka nemwuto yeysalopkey chascip-ulo
 恥ずかしかった-が 彼-が あまりにも なんともなく 喫茶店-に
 tuleokil-lay phyengceng-ul kacanghayss-ta. (153)
 入ってきた-ため 平然-を 装っ-た

[ET] Hiiragi and I had arranged to meet, after he got out of school, in a coffee shop on the fourth floor on a department store. In he came, wearing a **sailor-style girl's high school uniform, complete with middy blouse and skirt**. The truth is I was mortified, but he acted so natural that I managed to feign calmness. (118)

次に、「食」関連語彙の例を見ると、興味深いことにここでは ST 文化圏との距離の差が翻訳方法の選択に与える影響がこれまでとは逆の方向で働いている傾向が見て取れる。つまり、例(92)と例(93)のように ET では音訳や音訳に加筆するという異国化と思われる方法が取られている一方、KT では同化などの自国化方法が用いられている。まず、例(92)を見ると、ST の「すき焼き」が ET では「sukiyaki」と音訳になってい

るが、KT では「cenkol(鍋料理)」と KT 文化にある上位語に置き換えられており、ST の異化的要素が伝えられているとは言えない。

(92) [ST] 「だって私、鍋ものなんて何年も食べてないんだもの。すき焼きなんて夢にまで見ちゃったわよ。(…)」(村上、248)

[KT] “Cenkol kathun ke meke pon ci-ka atukhaketun. Myech nyen-ina
鍋料理 ような もの 食べて みた こと-が はるかだ 何 年-も
twaysse. Cenkol kkwum kkaci kkwessu-nikka. (…).” (430)
なった 鍋料理 夢 まで 見た-から

[ET] “I haven’t had anything like that for years. I used to dream about
sukiyaki-…” (376)

また、例(93)でも ST の「丼」が ET では「*donburi-everything piled on top of a bowl of rice*」と音訳に加筆が行われているが、KT では「tephpap」と一応逐語訳にはなっているものの、「tephpap」は KT 文化にもある料理名であるため、「丼」とは違う食べ物のイメージにつながり、ST の異化的要素が伝えられているとは言えない。

このように KT では特に「食」関連語彙の場合、KT 文化の類似した別のものに置き換えられることが多く見られるが、おそらく、食習慣や作り方などが異なる ET では見慣れない料理名を訳すとき、音訳(+加筆)の方法が多く用いられることになるのに対し、ST 文化と類似した食習慣や作り方などを有する KT では、ST の料理名などの語彙が KT 文化の語彙で置き換えられているためであると考えられる。つまり、ST 文化との類似性が高いほど同化できる TT の語彙の数も増えてしまうことから、ST 文化との近い距離がかえって自国化方法の選択につながる結果になっているのではないかと推測される。

(93) [ST] 「お父さん、^{どんぶり} 丼^{きら}も嫌いなのよね。警察で出されるごはんってみんな丼ものじゃない？」(宮部、31)

[KT] “Apeci, **tehpap** conglyu-nun silheha-si-nuntey, kyengchal-eyse
 父 井 種類-は 嫌い-[尊敬]-なのに 警察-で
 naonun pap-un cenpwu tehpap aniya?” (30)
 出る ご飯-は 全部 井 じゃない

[ET] “You know Dad doesn’t like *donburi*-everything piled on top of a bowl of rice. Isn’t that what the police feed people?” (23)

ただし、例(94)で見られるように、KTでもKT文化には存在しない「食」関連語彙の翻訳には主に音訳に訳注を付けるという異国化方法が取られており、ETでもパラフレーズなどの自国化方法が用いられていることもある。例(94)では、STの「懐石料理」がKTでは「kaisaykhi yoli (mantunun taylo han kaci-ssik sonnim-eykey naynohnun kokup yoli-yekcwu)(カイセキ料理(作り次第一つずつお客さんに出す高級料理-訳注))」のように音訳に解説を加えて訳されているが、ETでは「tea ceremony food」と料理名が省略され、簡単なパラフレーズで訳されていることが見られる。

加えて、固有名詞の「ホテル・オークラ」の翻訳方法も比べてみても、KTでは固有名詞に含められている情報を加筆して「cho kokup hotheyl-in okhwula(超高級ホテルであるオークラ)」と音訳している一方、ETでは「the most expensive hotel in Tokyo」のように固有名詞を省略して、その意味だけをパラフレーズで訳しているなど、両TTの翻訳戦略の差が明らかになっていることが分かる。

(94) [ST] (...)修学旅行っていや京都の高級旅館を借りきって塗りのお膳で懐石料理食べるし、年に一回ホテル・オークラの食堂でテーブル・マナーの講習があるし、とにかく普通じゃないのよ。(村上、114)

[KT] (...)swuhak yehayng-ilato kamyen Khyotho-uy kokup yekwan-ul thongccaylo
 修学 旅行-でも 行ったら 京都-の 高級 旅館-を 丸ごと
 chaci hay kaciko, chilki sopan-ey **kaisaykhi yoli (mantunun taylo**
 取って 塗り お膳-で 懐石 料理 作る 次第
han kaci-ssik sonnim-eykey naynohnun kokup yoli-yekcwu) lul
 一つ-ずつ お客さん-に 出す 高級 料理-訳注 を

mekkeyssta, lnyen-ey han pen ssik cho kokup hotheyl-in okhwula-eyse
 食べるし 1年-に 一度 ずつ 超 高級 ホテル-である オークラ-で
 theyipul mayne kangsup-ul hakeyssta..... amwuthun pothong-i
 テーブル マナー 講習-を するし とにかく 普通-では
 anilan maliya. (105-6)
 ないとの ことよ

[ET] High tuition, endless contributions, expensive school trips. For instance, if we went to Kyoto, they'd put us up in a first-class inn and serve us **tea ceremony food** on lacquer tables, and they'd take us once a year to the most expensive hotel in Tokyo to study table manners. I mean, this was no ordinary school. (78-9)

続いて、「住」関連語彙の例を見てみると、まず、例(95)のように両 TT 文化にともに異質な語彙の翻訳には、既に TT 文化に知られている情報を用いてパラフレーズで訳すという傾向が見られる。例(95)の「和室」は KT の場合、ほぼ「tatami-pang(畳部屋)」とパラフレーズで訳されており、ET でも「the Japanese-style room」か「the tatami room」(奥田、ET: 49)のようにパラフレーズが取られている。

(95) [ST] 私が帰宅すると、TV のある和室から祖母が出てきて、おかえりと言う。
 (吉本、30)

[KT] Nay-ka cip-ulo tolao-myen halmeni-nun theyllepichen-i issnun
 私-が 家-に 帰る-と 祖母-は テレビ-の ある
tatami-pang-eyse nawa, eseonela-lako malhan-ta. (29)
 畳部-屋-から 出て お帰り-と 言う

[ET] When I came home, my grandmother would come out of **the Japanese-style room** where the TV was and say, "Welcome home." (20)

また、両 TT 文化にともに見慣れない慣習を表す語彙の場合、パラフレーズの他にも

例(97)のように省略や同化の方法が用いられることもある。例(97)を見ると「敷金・礼金」が **KT** では「礼金」が省略され「敷金」だけが「pocungkum」と逐語訳で訳されており、**ET** でも「deposit and key money」のように「敷金」は逐語訳に、そして「礼金」は同化と思われる方法で訳されているなど、**KT**、**ET** ともに自国化方法が取られていることが分かる。

(96) [ST] そのなかに、今年の四月十二日付けで、「引っ越し費用」と「敷金・礼金」の記入があった。(宮部、122)

[KT] Ku kawuntey, olhay 4wel 12il nalcca-lo 'isa piyong' kwa
その なかに 今年 4月 12日 付けで 引っ越し 費用 と
'pocungkum' ilanun kiip-i issess-ta. (116)
保証金 という 記入-が あった

[ET] On April 12, there was an entry for “cost of moving” and “**deposit and key money.**” (78)

4.8.4. 度量衡単位

度量衡単位の翻訳においては、例(97)と例(98)で見られるように、両 **TT** ともにほぼ自国化翻訳が行われている。例(97)では、部屋の広さを表す単位として「畳」が使われているが、**KT** と **ET** では **ST** の「十畳」に当たる広さを各々の **TT** 文化で使われている単位に合わせてそれぞれ「tases phyeng(5坪)」と「four meters square」のように同化が用いられている。

(97) [ST] 板張りの床で、広さは十畳ほど。(宮部、117)

[KT] Patak-un namwu-lo toye issko, nelpi-nun tases phyeng cengto. (111)
床-は 木-で なって おり 広さ-は 5 坪 程度

[ET] The room had a wooden floor and was about **four meters square.** (75)

また、例(98)でも、温度を表すとき単位が摂氏である **ST** と、同じく摂氏で表記され

る KT ではそのまま「39to」になっているが、華氏を使う ET では「a temperature of 103」と調整されている。

ただし、度量衡単位の中でも ST の貨幣単位である「円」だけは、別途の調整が行われず KT、ET とともにそれぞれ「eyn(円)」と、「yen」で音訳されているが、貨幣単位を除いた距離や重さ、広さ、高さなどの度量衡単位の翻訳には両 TT とともにほぼ各 TT 文化に合わせた自国化方法が取られていると言える。

(98) [ST] 三十九度の熱があるときだって這って学校に行ったわよ。(村上、113)

[KT] 39to-kkaci yel-i ollassul ttay-to, kiekatasiphi hayse hakkyo-eyl
39 度-まで 熱-が 上がった とき-も 這うように して 学校-に
kasse. (105)
行った

[ET] I'd crawl to school with a temperature of 103. (78)

以上、文化関連語彙に対処する各 TT の翻訳方法についての分析と考察を試みた。文化関連語彙の翻訳には KT、ET とともに自国化翻訳の方法と異国化翻訳の方法がそれぞれ多く使われ、また二つ以上の方法が同時に用いられる場合も少なくなかったため、一貫した基準は見られない。

ただ、KT では ST の異化的要素の中で、同化などで置き換えられることはほぼ自国化方法で訳し、それが不可能な場合は解説などの異国化方法で訳すという傾向は見られる。一方、ET では音訳に加筆で説明するような方法を用いて異化的要素を伝えている場合もしばしば見られるが、多くの場合はパラフレーズや同化が用いられ、省略もかなり行われるなど、自国化方法の傾向があると言える。

なお、文化関連語彙の翻訳には、ST 文化圏との近さが翻訳方法の決定にこれまでとは逆の影響を与えており、ST 文化圏との距離と翻訳方法の選択についても今後考察を深める必要があると考えられる。

最後に、文化関連語彙の分析結果を表 10 でまとめておく。

	移植	音訳	借用翻訳	逐語訳	パラフレーズ	同化	省略	加筆	解説	合計
KT	7	34	0	88	53	88	20	4	11	305
ET	0	44	1	49	102	52	42	20	0	310

表 10 文化関連語彙の分析結果

第5章 おわりに

本研究では、異文化コミュニケーションとしての翻訳行為について、機能主義翻訳理論に基づき、自国化翻訳と異国化翻訳という観点から考察を試みた。具体的には、日本語を ST とする複数の TT を対照分析することで、日本語 ST の翻訳時に主にどのような部分で自国化と異国化翻訳の差が表れるのか、そこに一貫した基準は見られるのか、そして、ST 文化と TT 文化との距離が翻訳戦略の選択に何らかの影響を与えるのかについて考察した。

その結果、自国化翻訳と異国化翻訳という翻訳のスコパスは、次のような八つのカテゴリで発生することが明らかになった。各カテゴリとカテゴリ別の自国化・異国化翻訳の分析結果は以下のようにまとめられる。

- (1) **題目・目次**：KT、ET ともに自国化翻訳と異国化翻訳のスコパスが明らかに見られ、TT のスコパスの差が発生する最初に分かれ目でもある。
- (2) **呼称・人称ダイクシス**：KT、ET ともに ST での使い方に拘らず、それぞれの TT の社会文化に合わせた自国化翻訳の傾向が強い。
- (3) **交感的言語使用・文体**：KT、ET ともにそれぞれの TT の社会文化に合わせた自国化翻訳の傾向が強く、特に ET でそのような自国化戦略がより明らかに表れている。
- (4) **非言語コミュニケーション**：KT では異国化翻訳が、ET では自国化翻訳の傾向が強く、ST 文化圏と TT 文化圏との距離が翻訳戦略に影響していることがうかがえる。
- (5) **社会文化的慣習**：KT では異国化翻訳が、ET では自国化翻訳の傾向が強い。このような翻訳戦略の差は KT と ET の翻訳規範の差からも出ているが、ST 文化圏と TT 文化圏との距離もその選択に影響を及ぼしていると思われる。
- (6) **慣用表現**：KT、ET ともに ST と TT に普遍的な慣用表現を除いては、それぞれの TT の社会文化に合わせた自国化翻訳の傾向が強く、KT の場合、漢字成語にも自国化翻訳の方法が取られている。
- (7) **固有名詞・地名**：KT では異国化翻訳が、ET では自国化翻訳の傾向がうかがえる。ここでも両 TT の翻訳規範の差をはじめ、ST 文化圏との距離と言語体系の差異が影響を与えていると考えられる。

(8) **文化関連語彙**：KT、ET ともに一貫した基準は見られないが、TT 文化の要素に置き換えられない ST の異化的要素の場合、KT では主に異国化翻訳が、ET では自国化方法が取られる傾向はうかがえる。なお、ここでは ST 文化圏との距離が翻訳方法の決定にこれまでとは逆の方向へ影響していることも多い。

本研究での分析は最近の文学作品の一部だけを対象にしているため、分析対象によっては異なる結果が出ることもありうるが、日本語 ST の翻訳時に生じる自国化翻訳と異国化翻訳についてのある傾向は見る事ができた。

とはいえ、今回の分析に用いた「翻訳方法の一覧」の基準だけでは、二つ以上の方法が同時に使われたときや ST 文化圏との距離に近い TT の場合など、自国化翻訳と異国化翻訳の判断が容易ではない場合があるとの問題点が見られたため、今後より明確で細分化された基準を設定する必要があると思われる。

さらに、ST 文化圏との距離が TT の翻訳方法の選択に与える影響に関しても、その新たな基準に基づいた、より総合的な考察が求められよう。

なお、今回の分析結果からは、異文化コミュニケーションとしての翻訳行為とその結果とも言える異文化間交流の拡大が、再び自国化翻訳と異国化翻訳という翻訳方法の選択に影響を及ぼしていることがうかがえるため、今後、上記の問題点についての考察を深めると同時に、翻訳戦略の変化と異文化コミュニケーションとの関連性についても研究を進めたいと考えている。

【謝辞】

本論文を作成するにあたり、多くの方々にお世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。研究活動全般にわたり格別なるご指導とご高配を賜りました東北大学大学院国際文化研究科（国際文化交流論専攻）言語コミュニケーション論講座准教授中本武志先生に心より厚くお礼申し上げます。先生から教えていただいた全てのことは研究者としての道を歩む上で、これからも大きな力となり支えとなると思います。本当にありがとうございました。貴重なご教示とご助言を賜りました同講座教授宮本正夫先生、同講座教授小野尚之先生、同講座准教授ナロック ハイコ先生に心より感謝申し上げます。先生方には研究者としての心構えをはじめ、研究の方向性に至るまで有益なコメントと暖かい励ましの言葉を多くいただきました。重ねてお礼申し上げます。そして、このような貴重な機会を与えてくださった日本政府のご支援に謝意を表わしたいと思います。最後に、いつも温かく見守り、励ましてくれた家族に心から深く深く感謝いたします。

【参考文献】

- Adler, Ronald B.& Rodman, George. (2006) *Understanding Human Communication*.
New York: Oxford University Press.
- Baker, Mona (1992) *In Other Words: A coursebook on translation*. London and New
York: Routledge. (『말 바꾸기(言葉換え)』(2005) グァク・ウンジュほか訳 韓国文
化社)
- Bassnett, Susan. (1980/2002²) *Translation Studies*. London and New York: Routledge.
- Fawcett, Peter. (1997) *Translation and Language: Linguistic Approaches Explained*.
Manchester: St. Jerome.
- Fernandes, L. (2006) “Translation of Names in Children’s Fantasy Literature:
Bringing the Young Reader into Play”, *New Voices in Translation Studies* 2: 44-5.
- Hatim, Basil.& Mason, Ian. (1990) *Discourse and the translator*. London and New
York: Longman.
- Hatim, Basil.& Mason, Ian. (1997) *The Translator as Communicator*. London and New
York: Routledge.
- Hung, Eva. (ed.) (2005) *Translation and Cultural Change: Studies in history, norms
and image-projection*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Inggs, J. (2003) “From Harry to Garri: Strategies for the Transfer of Culture and
Ideology in Russian Translations of Two English Fantasy Stories”, *Meta* 48(1-2):
285-297.
- Israël, F. dir. (2002) *Identité, altérité, équivalence?: La traduction comme relation*.
Paris-Caen: Lettres Modernes Minard. (『통번역과 등가(通翻訳と等価)』(2004)
イ・ヒャンほか訳 韓国文化社)
- Kuhiwczak, Piotr.& Littau, Karin. (ed.) (2007) *A Companion to Translation Studies*.
Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Lathey, Gillian. (ed.) (2006) *The Translation of Children’s Literature: A Reader*.
Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Lefevere, André. (1992) *Translating Literature: Practice and Theory in a Comparative
Literature Context*. New York: The Modern Language Association of America.
- Leppihalme, Ritva. (1997) *Culture Bumps: An Empirical Approach to the Translation*

- of Allusions*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Munday, Jeremy. (2001) *Introducing Translation Studies: Theories and applications*. London and New York: Routledge.
- Napoli, Donna Jo. (2003) *Language Matters: A Guide to Everyday Questions about Language* : Oxford University Press.
- Nord, Christiane. (1991/2005²) *Text Analysis in Translation: Theory, Methodology, and Didactic Application of a Model for Translation-oriented Text Analysis*. Amsterdam-New York: Rodopi.
- Nord, Christiane. (1997) *Translating as a Purposeful Activity: Functionalist Approaches Explained*. Manchester: St. Jerome. (『번역 행위의 목적성-기능주의 번역론의 관점(翻訳行為の目的性-機能主義翻訳論の観点)』(2006) ジョン・ヨンイル ほか訳 韓国外國語大學校出版部)
- Reiss, Katharina. (2000) *Translation Criticism—The Potentials & Limitations: Categories and Criteria for Translation Quality Assessment*. Manchester, UK: St. Jerome Publishing.
- Snell-Hornby, Mary. (2006) *The Turns of Translation Studies*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Thoma, Chrystalla. (2006) *Combining Functional Linguistics and Skopos Theory: A Case Study of Greek Cypriot and British Folktales*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Toury, Gideon. (1995) *Descriptive translation studies*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Vinay, Jean-Paul. & Darbelnet, Jean. (1958/1977²) *Stylistique comparée du français et de l'anglais: Méthode de traduction*, Paris: Les Éditions Didier. (『불어와 영어의 비교문체론-번역 방법론(仏語と英語の比較文体論-翻訳方法論)』(2003) 田聖洪訳 高麗大學校出版部)
- Venuti, Lawrence. (1995/2008²) *The Translator's Invisibility: A History of Translation*. London and New York: Routledge.
- Venuti, Lawrence. (1998) *The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference*. London and New York: Routledge.

- Venuti, Lawrence. (ed.) (2000) *The Translation Studies Reader*. London and New York: Routledge.
- Vermeer, Hans J. (1996) *A Skopos Theory of Translation (Some argument for and against)*. Heidelberg: TEXTconTEXT (Band1)
- Vermeer, Hans J. (1997) "Translation and the "Meme"", *Target* 9:1, 155-166.
- Williams, Jenny.& Chesterman, Andrew. (2002) *The MAP: A Beginner's Guide to Doing Research in Translation Studies*. Manchester, UK & Northampton, MA: St. Jerome.
- Wyler, L. (2003) "Harry Potter for Children, Teenagers and Adults", *Meta* 48(1-2): 5-14.
- 池田理知子・E. M. クレーマー (2000) 『異文化コミュニケーション入門』 有斐閣ブックス
- 石井敏 ほか (編) (2001) 『異文化コミュニケーションの理論』 有斐閣ブックス
- 井出祥子・平賀正子 (編) (2005) 『異文化とコミュニケーション』 ひつじ書房
- 大橋良介 (編) (1993) 『文化の翻訳可能性』 人文書院
- ナイダ, E. A. (1972) 『翻訳学序説』 成瀬武史訳 開文社
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理 - 異文化をどう訳すか』 大修館書店
- 藤岡啓介 (2000) 『翻訳は文化である』 丸善ライブラリー
- 藤濤文子 (2004) 「翻訳における注のコミュニケーション機能について—『キッチン』の独英語訳を例に一」 『ドイツ文学論集』 第 33 号、pp. 27-38.
- 藤濤文子 (2005) 「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為—『ノルウェイの森』の独語訳分析」 『ドイツ文学論集』 第 34 号、pp. 31-50.
- 藤濤文子 (2006) 「機能主義的翻訳理論の展開と展望」 『ドイツ文学論攻』 第 48 号、pp. 007-026.
- 藤濤文子 (2007) 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』 松籟社
- ブロズナハン, リージャー. (1988) 『しぐさの比較文化』 岡田妙・斉藤紀代子訳 大修館書店
- 北条文緒 (2004) 『翻訳と異文化』 みすず書房
- 柳父章 (1982) 『翻訳語成立事情』 岩波新書
- 柳父章 (1998) 『翻訳語を読む-異文化コミュニケーションの明暗-』 丸山学芸図書
- ヴァーガス, マジョリー. (1987) 『非言語コミュニケーション』 石丸正訳 新潮選書

- 金ドンミ (2007) 「문학작품의 여성 번역가 문체 연구-화용·통사론적 특징 중심으로
(文学作品の女性翻訳家文体研究-話用・統辞論的特徴中心に)」 『翻訳学研究』 第 8 卷
1 号, pp. 37-60.
- 金ジェヒ (2008) 「문화관련어휘(Culture-bound terms) 번역방법 연구
(文化関連語彙翻訳方法研究)」 『国際会議通訳と翻訳』 第 10 卷(1)、pp. 25-43.
- 金春美ほか (2008) 『번역과 일본문학 (翻訳と日本文学)』 図書出版ムン
- 朴相益 (2006) 『번역은 반역인가(翻訳は反逆なのか)』 bluehistory
- 尹相仁ほか (2008) 『일본문학 번역 60년-현황과 분석(日本文学翻訳 60年-現況と
分析)』 ソミョン出版
- 李瑾嬉 (2005) 『이근희의 번역산책(李瑾嬉の翻訳散策)』 韓国文化社
- 李ボク임 (2003) 「번역에 있어서의 화용론적 고찰(翻訳に於いての話用論的考察)」
誠信女子大学校修士論文
- 李湘遠 (2006) 『한국 출판 번역 독자들의 번역평가규범 연구(韓国出版翻訳読者らの
翻訳評価規範研究)』 韓国学術情報(株)
- 李チャンス (2000) 「문학작품에서의 비유적 표현의 번역-Relevance Theory 의
관점에서(文学作品に於いての比喩的表現の翻訳-Relevance Theory の観点か
ら)」 『国際会議通訳と翻訳』 第 2 卷、pp. 57-83.
- 李ヘスン (2008) 「문화적 함축에서 야기되는 번역문제 고찰(文化的含蓄から惹起される
翻訳問題考察)」 『国際会議通訳と翻訳』 第 10 卷(1)、pp. 127-141.
- 田聖淇 (2008) 『번역인문학과 번역비평(翻訳人文学と翻訳批評)』 高麗大学校出版部
- 鄭好貞 (2007) 『통역·번역의 이해(通訳・翻訳の理解)』 韓国文化社
- 韓国文学翻訳院 (2007) 『문학번역의 이해(文学翻訳の理解)』 북스토리
- 韓国翻訳批評学会 (2007) 『번역비평(翻訳批評)』 高麗大学校出版部

【分析テキスト】

- 奥田英朗 (2006) 『イン・ザ・プール』 文春文庫
- 奥田英朗 (2007) 『인더풀(イン・ザ・プール)』 ヤン・オクグァン訳 ウンヘンナム
- Hideo Okuda (2006) *In the Pool*. trl. by Giles Murray. Tokyo: IBC Publishing.
- 宮部みゆき (1993) 『魔術はささやく』 新潮文庫
- 宮部みゆき (2006) 『마술은 속삭인다(魔術はささやく)』 키ム・ソヨン訳 북스피아

Miyabe, Miyuki. (2007) *The Devil's Whisper*. trl. by Deborah Stuhr Iwabuchi. Tokyo:

KODANSHA INTERNATIONAL.

村上春樹 (1991) 『ノルウェイの森』 講談社文庫

村上春樹 (1989/2007³) 『상실의 시대(喪失の時代)』 ユ・ユジョン訳 文学思想社

Murakami, Haruki. (2003) *Norwegian Wood*. trl. by Jay Rubin. London: VINTAGE

BOOKS.

吉本ばなな (1991) 『キッチン』 角川文庫

吉本ばなな (1999) 『키친(キッチン)』 김·난지유訳 民音社

Yoshimoto, Banana (1993) *Kitchen*, trl. by Megan Backus, Grove Press.

異文化コミュニケーションとしての翻訳行為 —機能主義翻訳理論の観点からの考察—

国際文化交流論専攻(言語コミュニケーション論講座)

A7KM1016 金 炫妣

第1章 はじめに

異文化コミュニケーションとは、異なる言語や文化的背景を持つ人々がコミュニケーションをとるとき、お互いの文化を異文化として認識し、理解しあう行為のことである。翻訳という行為ははじめから二つの言語と文化を前提として行われるため、翻訳時に生じる諸問題は言語内の要因はもとより、言語外の要因、つまり異質な両文化の差異からも発生すると思われる。そのため、そのような異文化の壁を乗り越えるための翻訳者の翻訳戦略と方法は、翻訳の目的(スコpos(Skopos)¹)によってそれぞれ異なると考えられる。

本研究の目的は、翻訳を起点テキスト(Source Text=ST、原文)の文化と目標テキスト(Target Text=TT、翻訳文)の文化の間で行われる異文化コミュニケーション行為として捉えている「機能主義翻訳理論」の立場から、効果的な異文化コミュニケーションのための翻訳者の翻訳スコposの差が実際の翻訳文にどのように表れているのかを明らかにし、異なるスコposが異文化コミュニケーションとしての翻訳行為にどのような影響を与えているのかを探ることにある。

第2章 理論的枠組み

2. 1. 機能主義翻訳理論

いわゆる「スコpos理論」に代表される機能主義翻訳理論は、翻訳とは異文化コミュニケーション行為であり、TTは翻訳のスコposとそのテキストがTTの社会文化圏で持つ機能によって決められると主張する。従って、STとTTの間に絶対的な等価性は存在せず、特定の状況の下でのTTの遂行機能によって多様なレベルの等価性が存在することになる(Reiss and Vermeer 1984; Nord 1997)。

なお、Nord(1991/2005²)はこうした機能主義的アプローチに基づき、翻訳を翻訳過程の機能を中心に「記録的翻訳」と「道具的翻訳」に分け、それをまた翻訳の結果としてのTTの機能を中心により詳しく分類している。さらに、Nord(1997)は、翻訳教育に特に有

¹ スコpos(Skopos)とは、「的、標的」という意味のギリシャ語で、Vermeerが「翻訳の目的」を表す用語として使いはじめた概念である。

用な三つの機能主義的要素として、「翻訳ブリーフ(Translation Brief)の重要性」、「ST分析の役割」、「翻訳問題の機能的階層化」を強調している。

2. 2. 翻訳方法のストラテジー

藤濤は翻訳行為と異文化コミュニケーションについて、機能主義翻訳理論の立場から、様々な比較分析を行っている。なかでも、藤濤(2005)では、スコポス理論をベースにして諸翻訳方法を分類した「翻訳方法の一覧」を用いて『ノルウェイの森』のドイツ語訳を記述分析しており、また、藤濤(2006)では、一つの ST と複数の日本語の TT の比較分析を通じて、各翻訳者のスコポスが各々の TT にどのように表れているかを考察している。その他、藤濤(2007)では、スコポス理論を応用した翻訳の評価方法を提案するなど、機能主義翻訳理論を展開しながら、その役割と重要性を提唱している。

2. 3. 自国化翻訳と異国化翻訳

スコポス理論の適用と密接な関連を持つ翻訳戦略の一つとして、Venuti(1995/2005²)が示した「自国化翻訳(domestication)」と「異国化翻訳(foreignization)」という概念が挙げられる。自国化翻訳とは、ST の異国的で見慣れない要素を TT の文化と慣習に合わせて翻訳し、TT の異質感を最小限にして読者の理解を高める戦略である。これに対し、異国化翻訳とは、ST の異国的要素を TT にそのまま残して、それが TT であることがはっきり分かるように翻訳し、TT の異質感を最大化する戦略である。

第3章 研究方法

本研究では、異文化コミュニケーション行為としての翻訳の機能を考察する上で、Venuti の自国化翻訳と異国化翻訳という二つのスコポスの観点から分析を行う。具体的な分析は、藤濤(2005)の「翻訳方法の一覧」を用いて行う。その中で (1)移植 (2)音訳 (3)借用翻訳 (4)逐語訳を ST 中心の異国化翻訳方法、そして、(5)パラフレーズ (6)同化 (7)省略 (8)加筆を TT 中心の自国化翻訳方法と見なし、(9)解説は実例から判断する。

なお、分析対象としては日本語 ST の村上春樹著『ノルウェイの森』、吉本ばなな著『キッチン』、奥田英朗著『イン・ザ・プール』、宮部みゆき著『魔術はささやく』と各々の韓国語訳と英語訳を用いて具体的な分析を進める。

第4章 分析と考察

4. 1. 目次・題目

題目と目次は、異文化コミュニケーションを成功させるための、翻訳者あるいは出版社の翻訳戦略が明らかに見られる箇所であり、自国化翻訳と異国化翻訳という TT のスコポスの差が発生する最初の分かれ目でもあると考えられる。

4. 2. 呼称・人称ダイクシス

呼称と人称ダイクシスの翻訳には、方法としては異国化翻訳と見なされる逐語訳が多く取られているが、そこから ST の異化的要素が伝わっているとは言い難く、むしろ ST での使い方に拘らず、TT の社会文化に合わせた自国化翻訳の傾向が強いと思われる。これらの要素は各文化別に異なる語用論的法則に従って使われているため、より効果的な異文化コミュニケーションのためにも自国化戦略が優先的に取られていると考えられる。

4. 3. 交感的言語使用・文体

含意が多く、複雑に絡み合った話し手と聞き手との関係を表す機能を果たしている日本語 ST の交感的言語使用の翻訳には、KT、ET ともにその根底にある含意を探り、交感的機能をより明確に伝えるための加筆や同化などの方法が用いられている。すなわち、交感的言語使用の翻訳にはそれぞれの TT の社会文化に合わせた自国化翻訳の傾向が強く、特に ET ではそのような自国化戦略がより明らかに見られる。

4. 4. 非言語コミュニケーション

非言語コミュニケーションの翻訳には、KT ではほぼ逐語訳に近い異国化方法が、ET では主にパラフレーズや同化のような自国化方法が用いられており、ST 文化圏と TT 文化圏との距離によって翻訳戦略にも差が出ていることがうかがえる。ただし、KT の場合、方法としては異国化戦略が取られているとはいえ、それが ST の異化的効果を TT に与えているとは思われないため、このことについては今後更なる考察が必要になるとと思われる。

4. 5. 社会文化的慣習

社会文化的慣習の翻訳には、KT では主に逐語訳のような異国化方法が取られており、ST の異質的な慣習には訳注などの解説を通じて、異化的要素を積極的に取り入れる傾向が見られる。一方、ET では解説は使わず加筆やパラフレーズなどの自国化方法を用いて訳す傾向が強い。このような翻訳戦略の違いは KT と ET の翻訳規範の差からも出ていると思われるが、ST 文化圏との距離もその選択に影響していると考えられる。

4. 6. 慣用表現

文化的特殊性が強く、その形や使い方などの慣習的差異が翻訳時の問題点として指摘されている慣用表現の翻訳には、ST と TT の文化で共通して使用されている慣用表現は主に逐語訳などの方法が取られている一方、ST 文化固有のものに対しては TT それぞれの文化に合わせたパラフレーズや同化、省略などの自国化戦略の方法が用いられる傾向が高い。特に、ET では KT で逐語訳になっているところもほぼパラフレーズが用いられており、省略もしばしば見られるなど、自国化方法がより好まれていることがうかがえる。

4. 7. 固有名詞・地名

固有名詞と地名の翻訳には、KT では加筆や同化のような方法も取られてはいるが、ST の異化的要素を音訳とともに訳注を付けてなるべく伝えようとする異国化翻訳の傾向が強い。一方、ET では ST の異化的要素を主に同化や加筆、パラフレーズの方法を用いて訳しており、度々省略も見られるなど自国化方法の傾向が見られる。このような翻訳戦略の違いは両 TT の翻訳規範の差異からも出ているが、やはり TT と ST 文化圏との距離、そして言語体系の差からも影響を受けていると考えられる。

4. 8. 文化関連語彙

文化関連語彙の翻訳には両 TT で自国化翻訳の方法と異国化翻訳の方法がともに多く使われ、また二つ以上の方法が同時に用いられる場合も少なくなかったため、一貫した基準は見られない。ただ、KT では ST の異化的要素の中で、同化などで置き換えられることはほぼ自国化方法で訳し、それが不可能な場合は解説などの異国化方法で訳すという傾向は見られる。一方、ET では音訳に加筆で説明するような方法を用いて異化的要素を伝えている場合もしばしば見られるが、多くの場合はパラフレーズや同化が用いられ、省略もかなり行われるなど、自国化方法の傾向があると言える。

なお、文化関連語彙の翻訳には、ST 文化圏との近さが翻訳方法の決定にこれまでとは逆の影響を与えており、ST 文化圏との距離と翻訳方法の選択についても今後考察を深める必要があると考えられる。

第5章 おわりに

本研究では、異文化コミュニケーションとしての翻訳行為について、機能主義翻訳理論に基づき、日本語を ST とする複数の TT を自国化翻訳と異国化翻訳という観点から考察した。その結果、自国化翻訳と異国化翻訳という翻訳のスコパスは、(1) 題目・目次 (2) 呼称・人称ダイクシス (3) 交感的言語使用・文体 (4) 非言語コミュニケーション (5) 社会的文化的慣習 (6) 慣用表現 (7) 固有名詞・地名 (8) 文化関連語彙 の八つのカテゴリーで発生し、各カテゴリー別に自国化・異国化翻訳のある傾向が見られることが明らかになった。

とはいえ、今回の分析基準だけでは自国化翻訳と異国化翻訳の判断が容易ではない場合があり、今後より明確で細分化された基準を設定する必要があると思われる。

なお、今回の分析結果からは、異文化コミュニケーションとしての翻訳行為の結果とも言える異文化間交流の拡大が、再び自国化翻訳と異国化翻訳という翻訳方法の選択に影響を及ぼしていることがうかがえるため、今後翻訳戦略の変化と異文化コミュニケーションとの関連性についても研究を進めたいと考えている。